

茨城県教育財団文化財調査報告第404集

# 元宮本前山遺跡 2

上河原崎・中西特定土地地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書5

平成 27 年 3 月

茨 城 県  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第404集

もとみやもとみやもとみや  
**元宮本前山遺跡 2**

上河原崎・中西特定土地地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書5

平成 27 年 3 月

茨 城 県  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

茨城県は、世界的な科学技術研究の中心であるつくば市において、国際都市にふさわしい街づくりを推進しております。

その事業の一環として、平成17年8月に開通した「つくばエクスプレス」の沿線開発としての土地区画整理事業が継続して進められています。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財が所在することから、これを記録保存する必要があるため、当財団は茨城県からの発掘調査について委託を受け、平成13年度に鳥名ツバタ遺跡、平成16年度に元宮本前山遺跡Ⅰ区・鳥名ツバタ遺跡、平成17年度に下河原崎谷中台遺跡・鳥名ツバタ遺跡、平成20・24・25年度に元宮本前山遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の発掘調査を実施しました。その成果の一部は、すでに当財団の『文化財調査報告』第203・265・282・292集として刊行しています。

本書は、平成20・24・25年度に調査を行った元宮本前山遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の調査成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 鈴木 欣一



## 例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成20・24・25年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字上河原崎元宮本字前山49番地の4ほかに所在する元宮本前山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
  - 調査 平成20年4月1日～4月30日（Ⅱ区）  
平成24年8月1日～8月31日（Ⅲ区）  
平成25年11月1日～11月30日（Ⅳ区）
  - 整理 平成26年4月1日～6月30日
- 3 発掘調査は、平成20年度が調査課長池田晃一、平成24年度が調査課長櫻村宣行、平成25年度が調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
  - 平成20年度
    - 首席調査員兼班長 三谷 正
    - 主任調査員 大関 武
  - 平成24年度
    - 首席調査員兼班長 稲田義弘
    - 次席調査員 兼子博史
    - 調査員 田村雅樹
  - 平成25年度
    - 首席調査員兼班長 酒井雄一
    - 首席調査員 奥沢哲也
    - 調査員 盛野浩一
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員海老澤稔が担当した。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 8,200 \text{ m}$ 、 $Y = + 18,240 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 FP - 竈跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑 SY - 炭焼窯 TP - 陥し穴  
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器  
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は600分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩	 炉・火床面・繊維土器断面
 粘土範囲・炭化材・煤	 柱当り
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - 硬化面	

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は( )を、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

- 7 今回の報告分で、整理段階で遺構名を変更したものは以下のとおりである。

変更 平成20年度調査区 SI 23 → SI 28 SI 24 → SI 29 SI 25 → SI 30 SK55 → SK85 SK56 → SK86  
SK57 → SK87 SK58 → SK88 SK59 → SK89 SK60 → SK90 SK61 → SK91  
SK62 → SK92 SK63 → SK93 SK64 → SK94 SK65 → SK95 SK66 → SK96  
SK67 → SK97 SK68 → SK98



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
陥し穴	11
2 古墳時代の遺構と遺物	11
堅穴建物跡	11
3 その他の遺構と遺物	43
(1) 炭焼席跡	43
(2) 土坑	44
(3) 遺構外出土遺物	45
第4節 まとめ	47
写真図版	PL 1～12
抄 録	



## 元宮本前山遺跡の概要

### 遺跡の位置と調査の目的

元宮本前山遺跡は、つくば市の南西部、西谷田川左岸の標高20～24mの台地上に位置しています。当遺跡の調査は土地区画整理事業に伴うもので、茨城県教育財団が平成16年度から4回にわたり、調査を行いました。



今回の報告は、平成20・24・25年度に調査を行ったもので、総面積は1,460㎡です。調査区は、遺跡の北西部と南部にあたる台地端部に位置しています。

### 調査の内容

調査では、古墳時代中期（約1,600年前）の<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡10棟のほか、縄文時代の<sup>おとあな</sup>陥し穴1基が確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、<sup>はじき</sup>土師器（<sup>わん</sup>碗・<sup>かん</sup>罎・<sup>たかつき</sup>高坏・<sup>つぼ</sup>壺・<sup>かめ</sup>甕・<sup>こががめ</sup>小形甕）、土製品（土玉）、石器（<sup>いし</sup>砥石・<sup>だいし</sup>台石）、石製品（<sup>くだたま</sup>管玉・<sup>うすだま</sup>白玉・<sup>ゆうこうえんぱん</sup>有孔円板・<sup>けんがたひん</sup>剣形品）、金属製品（<sup>こぼね</sup>小札・<sup>やじり</sup>鎌・<sup>かま</sup>鎌）などです。



第24号竪穴建物跡から出土した土師器



作業風景



第23号竪穴建物跡（8mを超す大型建物）



第24号竪穴建物跡 埴・高坏出土状況



第24号竪穴建物跡 埴出土状況

## 調査の結果

当遺跡では、前回の調査も合わせると31棟の竪穴建物跡が確認できました。出土土器から、5世紀前葉から中葉にかけての短期間に営まれた集落であることがわかりました。集落は2時期に分けられ、3つのグループで構成され、各グループは7mを超す大型の竪穴建物を中心として、5棟から7棟で成り立っていたようです。

第24号竪穴建物跡は、柱が抜かれた後、多くの土器が残されたまま、上屋や廃材が燃やされた焼失建物跡です。出土土器の多くは、<sup>すす</sup>煤が付着していました。ところが、いくつかの土器には煤が付着しておらず、焼土層の間や土器片の上に置かれた状態で出土しました。焼失の後、焼土層を掘りくぼめ、高坏や土器片の上に埴<sup>もな</sup>を供える祭祀的行為がなされたようです。古墳時代中期における建物を廃絶したときの祭祀の様子を垣間見ることができました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、首都圏とつくば研究学園都市を結ぶ「つくばエクスプレス」を開通させるとともに、それに伴う沿線開発に取り組んでいる。

平成6年8月18日、茨城県知事は茨城県教育委員会教育長あてに、上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年3月3日～6日、3月9日～13日及び平成19年11月29日に元宮本前山遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成10年6月1日及び平成19年12月10日、茨城県教育委員会教育長は茨城県知事あてに、事業地内に元宮本前山遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成15年1月22日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく元宮本前山遺跡に関する土木工事等について通知した。平成15年2月13日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

平成20年2月27日、平成24年2月13日、平成25年2月20日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長あてに上河原崎・中西特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成20年2月27日、平成24年2月23日、平成25年2月20日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、元宮本前山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成20年4月1日から4月30日、平成24年8月1日から8月31日及び平成25年11月1日から11月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

元宮本前山遺跡の当報告書に係る調査は、平成20年4月1日から4月30日、平成24年8月1日から8月31日及び平成25年11月1日から11月30日まで実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	平成20年度(Ⅱ区) 4月	平成24年度(Ⅲ区) 8月	平成25年(Ⅳ区) 11月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	■	■
遺構調査	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理	■	■	■
補足調査 撤収		■	■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

元宮本前山遺跡は、茨城県つくば市大字上河原崎元宮本前山49番地の4ほかに所在している。

つくば市は、筑波山の南西に広がる標高20～25mの平坦な台地上に位置している。この台地は、筑波・稲敷台地と呼ばれ、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川の二つの河川によって区切られている。それぞれの河川によって大きく開析された流域には、標高約5mほどの沖積地が発達している。台地は、東から花室川、蓮沼川、小野川、谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れて浅く開析され、谷津や低地が細長く入り組んでいる。

筑波・稲敷台地は、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層、砂礫層、さらに常粘粘土層と呼ばれる泥質粘土層（層厚0.3～5.0m）、褐色の関東ローム層（層厚0.5～2.5m）が連続して堆積し、最上部は腐食土層になっている<sup>1)</sup>。

当遺跡の所在する上河原崎地区は、つくば市の南西部、旧谷田部町域に位置している。当遺跡は、西谷田川に面した標高20～24mの台地端部に位置している。台地は主に畑地として耕作され、沖積低地は水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は、大部分が山林で、一部が畑地や宅地であった。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の小貝川や谷田川、西谷田川、蓮沼川流域の台地上には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。

旧石器時代では、西谷田川左岸台地上に当遺跡<sup>2)</sup>〈1〉や下河原崎谷中台遺跡<sup>3)</sup>〈3〉、鳥名ツツバタ遺跡<sup>4)</sup>〈30〉、鳥名榎内南遺跡〈27〉などが存在する。当遺跡Ⅰ区の調査では、石器集中地点1か所が確認され、ナイフ形石器や石核、台石などが出土している。さらに、当遺跡の南約1kmに位置する下河原崎谷中台遺跡では、石器集中地点2か所が確認され、ナイフ形石器、角錐状石器のほか石核や剥片が出土している。

縄文時代の遺跡は、西谷田川左岸の台地縁辺部に立地する当遺跡のⅠ区では、早期の炉穴や陥し穴が確認されている。下河原崎谷中台遺跡では、早期の炉穴や後・晩期の集落跡が確認されている。小貝川左岸の台地上に位置する真瀬山田遺跡<sup>5)</sup>〈40〉は、中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土し、隣接する真瀬堀附南遺跡〈36〉、真瀬山田北遺跡〈39〉、鍋沼新田長峰遺跡〈38〉からも縄文土器片が出土していることから、広い範囲に集落が存在していたと想定される。また、真瀬山田遺跡から4kmほど小貝川上流に位置する上郷神谷森遺跡<sup>6)</sup>〈47〉では、中期末葉の竪穴建物跡が18棟確認されている。

弥生時代の遺跡は少なく、谷田部地区では、中期から後期の遺物が出土した鳥名境松遺跡<sup>7)</sup>や下河原崎高山遺跡〈5〉、鳥名一丁田遺跡などが確認されているだけである。

古墳時代になると、遺跡数の増加が顕著になる。前期では、谷田川右岸の台地上に位置する鳥名境松遺跡、鳥名熊の山遺跡<sup>8)</sup>〈21〉、鳥名前野遺跡<sup>9)</sup>、鳥名前野東遺跡<sup>10)</sup>や小貝川右岸の台地上に位置する上郷神谷森遺跡などが調査され、鳥名前野東遺跡では、集落に付随した形で方形周溝墓が3基確認されている。鳥名境松遺跡では、竪穴建物跡27棟、上郷神谷森遺跡では、竪穴建物28棟が確認され、沖積地を望む台地端部に集落が

形成されている。

中期になると、集落は前述した遺跡に加え、西谷田川沿いにまで広がりを見せ、当遺跡、下河原崎谷中台遺跡<sup>11)</sup>、鳥名ツバタ遺跡、真瀬三度山遺跡<sup>12)</sup>などでも集落跡が確認されている。当遺跡Ⅰ区の調査では、竪穴建物跡22棟が調査され、竪穴建物内に石製模造品製作跡が確認されている。下河原崎谷中台遺跡では、当時の竪穴建物跡が32棟確認され、琴柱形石製品が出土し、注目されている。

後期になると、谷田部地区では、古墳群11か所、約300基が確認されており<sup>13)</sup>、急速に古墳が築造されていたことが分かる。当遺跡周辺には、下河原崎高山古墳群<sup>14)</sup>〈4〉、鳥名榎内古墳群〈26〉、真瀬新田古墳群〈31〉、鳥名関ノ古墳群、鳥名前野古墳〈24〉、面野井古墳群などが確認されている。集落跡では、当遺跡は一時期だけで廃絶されているが、鳥名ツバタ遺跡、下河原崎中台遺跡、鳥名前野東遺跡では、中期に比べて内陸部まで集落が拡大している。また、鳥名熊の山遺跡では、集落が一挙に台地全体に広がり、一大拠点集落を形成し、当地域が再編成されたことがうかがえる。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

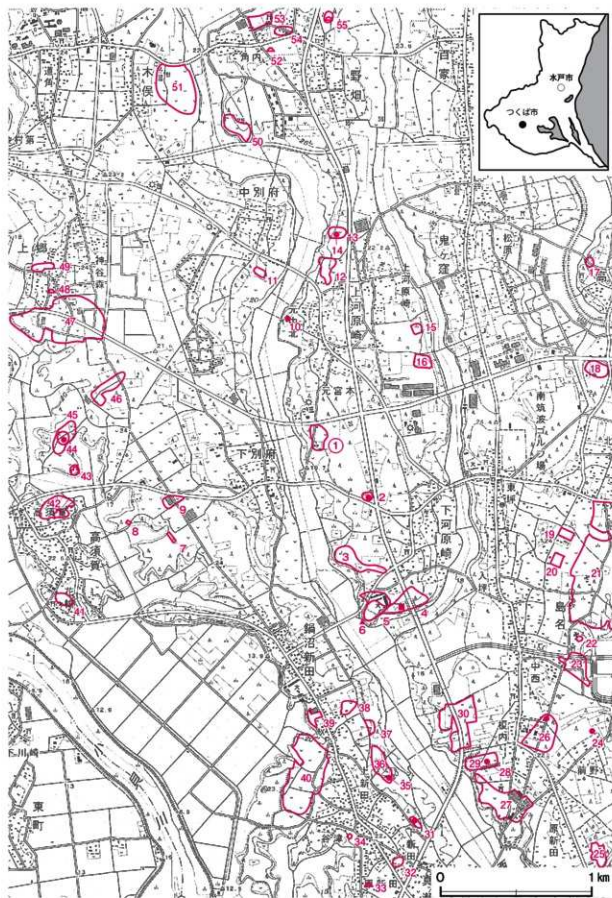
#### 註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 高野裕隆「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第265集 2006年3月
- 3) 高野裕隆「下河原崎谷中台遺跡 鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第282集 2007年3月
- 4) 菅川修「鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第203集 2003年3月
- 5) 谷田部の歴史編さん委員会『谷田部の歴史』谷田部町教育委員会 1975年9月
- 6) 小泉光正「一般国道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第66集 1991年3月
- 7) 久野俊彦「主要地方道取手筑後線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 境松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 8) a 福田義弘「熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 2002年3月  
b 松本直人「熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第236集 2005年3月
- 9) 福田義弘「鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 鳥名前野遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第175集 2001年3月
- 10) 寺門千穂・田原康司・梅澤貴司「鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 11) 齋藤真弥「下河原崎谷中台遺跡 下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」『茨城県教育財団文化財調査報告』第292集 2008年3月
- 12) 白田正子「〔仮称〕壹九地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 三度山遺跡 古屋敷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第132集 1998年3月
- 13) 註5) に同じ
- 14) 註11) に同じ

#### 参考文献

- ・つくば市教育委員会『つくば市遺跡地図』2001年7月  
・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』2001年3月

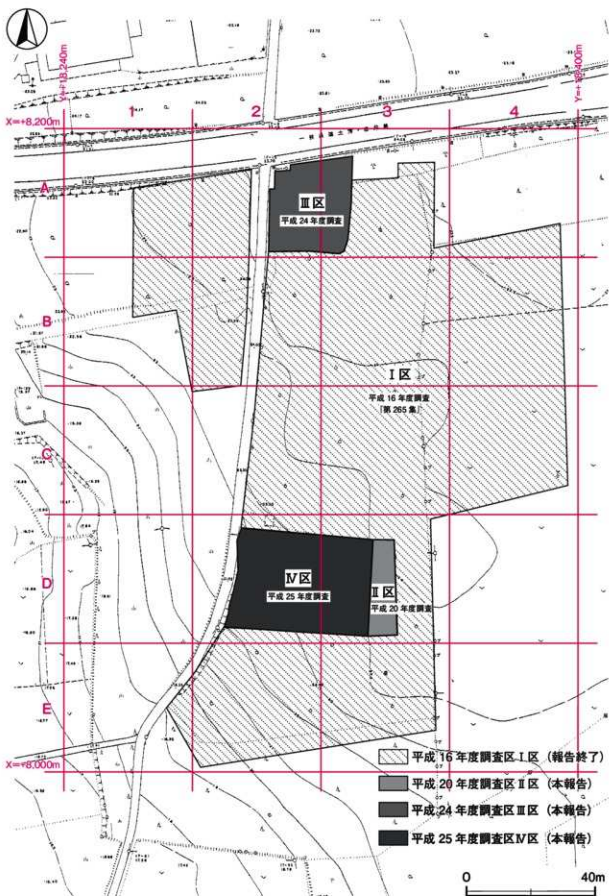




第1図 元宮本前山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「谷田部」「上郷」）

表1 元宮本前山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	元宮本前山遺跡	○	○	○	○	○		29	鳥名榎内遺跡				○			
2	下河原崎古墳群				○			30	鳥名ツバタ遺跡	○	○		○		○	○
3	下河原崎谷中台遺跡	○	○		○	○		31	真瀬新田古墳群				○			
4	下河原崎高山古墳群				○			32	真瀬中畑遺跡	○		○				○
5	下河原崎高山遺跡			○	○			33	真瀬西原塚						○	○
6	下河原崎高山竈跡				○			34	真瀬神田谷津遺跡	○						
7	高須賀道城入遺跡		○			○		35	真瀬中道古墳				○			
8	高須賀堂ノ前遺跡		○					36	真瀬堀附南遺跡	○		○				
9	高須賀遺跡				○		○	37	真瀬堀附北遺跡				○			
10	元中北鹿島明神古墳				○			38	鍋沼新田長峰遺跡	○		○				
11	中別府宮前遺跡				○	○	○	39	真瀬山田北遺跡	○		○				
12	上河原崎本田遺跡				○	○	○	40	真瀬山田遺跡	○		○	○			
13	上河原崎小山台古墳				○			41	高須賀ハナ遺跡	○						
14	上河原崎八幡脇遺跡					○		42	高須賀城跡						○	
15	上河原崎前山古墳				○			43	熊の山城遺跡						○	
16	元中北東藤四郎遺跡				○			44	高須賀熊の山古墳群				○			
17	高田和台台遺跡				○			45	高須賀熊の山遺跡			○	○			
18	鳥名関の台遺跡				○			46	上郷院内山遺跡	○						
19	鳥名中代遺跡					○		47	上郷神谷森遺跡	○		○	○			
20	鳥名本田遺跡				○		○	48	上郷福性院塚						○	○
21	鳥名熊の山遺跡	○		○	○	○	○	49	上郷神谷森北遺跡	○			○	○	○	○
22	鳥名薬師遺跡				○			50	上郷角内南遺跡				○	○		
23	鳥名八幡前遺跡				○			51	木俣本田遺跡							○
24	鳥名前野古墳				○			52	上郷山ノ神塚						○	○
25	鳥名タカドロ遺跡	○		○				53	上郷障屋跡							○
26	鳥名榎内古墳群				○			54	上郷角内遺跡	○						
27	鳥名榎内南遺跡	○			○	○		55	野畑天神後塚群						○	○
28	鳥名榎内西古墳				○											



第2図 元宮本前山遺跡調査区設定図 (つくば市都市計画図2500分の1より作成)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

元宮本前山遺跡は、つくば市の南西部、西谷田川左岸の標高20～24mの台地縁辺部に立地している。今回報告するのは、平成20年度に調査したⅡ区(152㎡)、平成24年度に調査したⅢ区(460㎡)、平成25年度に調査したⅣ区(848㎡)であり、Ⅱ・Ⅳ区は平成16年度に調査したⅠ区(14,910㎡)の南西部に、Ⅲ区は北西部にあたる。当遺跡は古墳時代中期を中心とした旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。

当遺跡Ⅱ～Ⅳ地区の調査の結果、縄文時代の陥し穴1基、古墳時代の竪穴建物跡10棟、時期不明の炭焼窯跡1基、土坑42基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に14箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、弥生土器(深鉢)、土師器(碗・埴・高坏・壺・甕・小形甕)、土製品(土玉)、石器(砥石・台石)、石製品(管玉・白玉・有孔円板・剣形品)、鉄製品(小札・鐵・鎌)などである。

### 第2節 基本層序

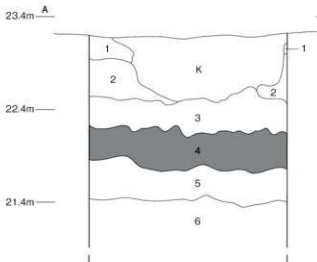
Ⅰ区の北東部(A416区)にテストピットを設定し、第3図に示すような土層堆積の状況を確認した。土層は6層に分層された。土層の観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりともに弱く、層厚は22～25cmである。

第2層は、明褐色のソフトローム層である。粘性がやや強く、層厚は40～44cmである。

第3層は、暗褐色のソフトローム層である。粘性がやや強く、層厚は25～40cmである。本層は、第2黒色帯に対比される第4層の上層にあたる。テストピットの土層観察では、ガラス粒子は確認されなかったが、本層の下部が始良Tn火山灰(AT)を含む層と考えられる。

第4層は、暗褐色のハードローム層である。粘性・締まりとともに強く、層厚は30～45cmである。第2黒色帯に対比される。



第5層は、にぶい褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は30～45cmである。

第6層は、にぶい褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに極めて強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認できた。

第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴1基が確認できた。以下、遺構について記述する。

陥し穴

##### 第8号陥し穴 (SK93) (第4図)

調査年度 平成20年度

位置 調査区南部のD3e5区、標高24mほどの台地端部に位置している。

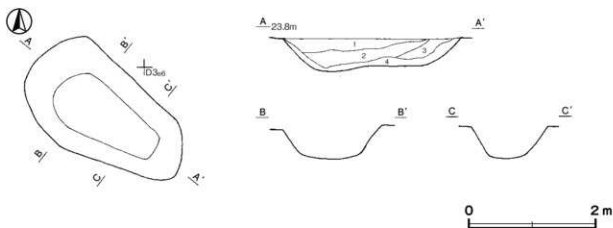
規模と形状 長径2.82m、短径1.54mの楕円形で、長径方向はN-48°-Wである。深さは48cmで、底面は幅80cmほどである。壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。暗褐色土、黒褐色土が東側から流れ込んでおり、自然堆積である。

土層解説

- |                           |                 |
|---------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量   |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

所見 位置や形状から、陥し穴と考えられる。



第4図 第8号陥し穴実測図

#### 2 古墳時代の遺構と遺物

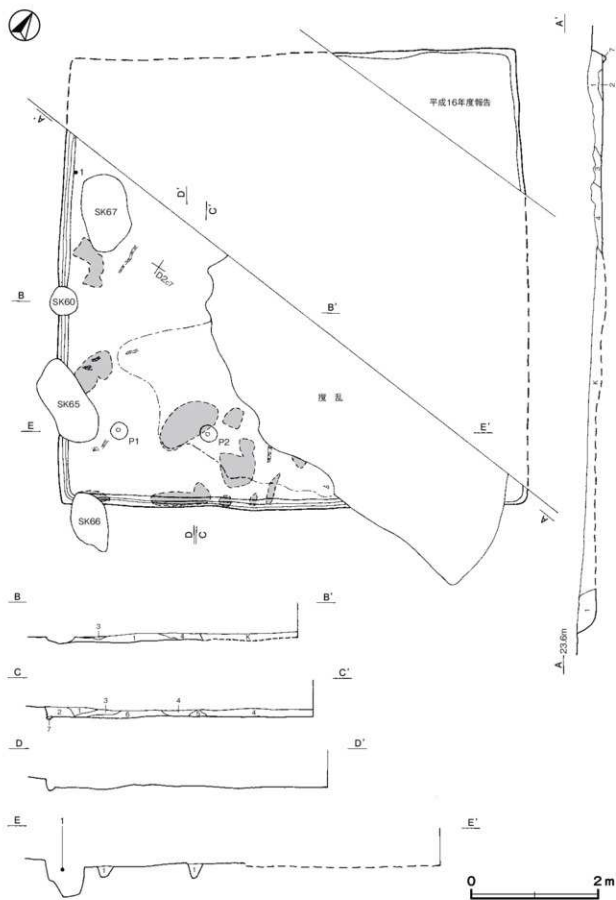
当時代の遺構は、堅穴建物跡10棟が確認できた。以下、遺構及び遺物について記述する。

堅穴建物跡

##### 第21号堅穴建物跡 (第5・6図)

調査年度 北コーナー部は平成16年度に調査し、当財団調査報告『第265集』として報告している。南半部は平成25年度に調査したが、平成16年度調査区との間は調査できなかった。

位置 調査区南西部のD2b7区、標高23mほどの台地端部に位置している。



第5図 第21号竖穴建物跡実測図

**重複関係** 第60・65～67号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸7.40m、短軸7.20mの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁は高さ10～16cmで、ほぼ直立している。

**床** 西部はほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。西部の覆土下層から床面にかけて、焼土塊や炭化材が確認できた。

**ピット** 2か所。P1は深さ20cmで、配置から支柱穴である。P2は深さ24cmで、P1とともに南東壁と平行した位置にあり、補助支柱穴と考えられる。P1・P2の覆土に焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから、上層が焼失した段階で、柱穴は開口していたと思われる。

**P1土層解説**

1 濃い褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量

**P2土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物中量、焼土粒子少量

**覆土** 7層に分層できる。ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                               |                               |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量  |
| 2 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量    | 6 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子少量     | 7 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量          |
| 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量   |                               |

**遺物出土状況** 土師器片111点(埴26、高坏15、甕類70)が、西部の覆土下層から床面にかけて出土している。1は西壁際の床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものとみられる。また、本跡を掘り込んでいる第67号土坑の覆土中から鉄製品1点(小札)が出土している。M1は、土師器片とともに出土していることから、本跡に伴うものと考えられる。

**所見** 西部の覆土下層から床面にかけて焼土塊や炭化材が確認できたことから、焼失建物跡である。時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第6図 第21号竪穴建物跡出土遺物実測図

第21号竪穴建物跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	埴	[80]	(94)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面へラ磨き 体部へラ削り後へラナデ	西壁際床面	40% PL8
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M1	小札	(68)	14～19	01～02	(5.99)	鉄	断面長方形	下半少し縮広	孔2か所	覆土中	PL12

### 第23 A号竪穴建物跡（第7・8図）

調査年度 平成24年度

位置 調査区北西部のA2h0区、標高24mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第23 B号竪穴建物跡内で確認され、柱穴は第23 B号竪穴建物の構築前に埋め戻されている。

規模と形状 壁は第23 B号竪穴建物の構築時に壊されており、柱穴の位置や掘方の形状から長軸6.90m、短軸6.45mの方形で、主軸方向はN-24°-Wと推測される。

床 中央部に掘方と思われる長径5.25m、短径5.03mの不定形で、深さ5～12cmの掘り込みが確認できた。貼床はロームブロックを多量に含む明褐色土及びロームブロック、黒色粒子を含むにぶい黄褐色土で構築されているが、踏み固められてはいない。

ピット 8か所。P8・P9は掘方の底面から確認でき、P7・P10と組み合わせ、主柱穴と思われる。P7～P10は深さ34～44cmである。P7・P8では柱抜き取り痕が確認でき、柱が抜き取られた後、ロームブロックを多量に含む褐色土などで埋め戻されている。P11は深さ16cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P12は深さ18cm、P13は深さ15cm、P14は深さ16cmで、位置から補助柱穴と考えられる。

#### P7～P9土層解説

- |         |                         |       |                  |
|---------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 褐色    | ロームブロック多量、黒色粒子少量、炭化粒子微量 | 3 黄褐色 | ロームブロック多量、黒色粒子少量 |
| 2 にぶい褐色 | ロームブロック多量、黒色粒子少量        | 4 褐色  | ロームブロック中量、黒色粒子少量 |

遺物出土状況 土師器細片3点が、掘方の底面から出土している。

所見 本跡と第23 B号竪穴建物跡との新旧関係は、掘方の底面で、柱穴や出入口施設に伴うと思われるピットが確認できており、本跡が古い。床面が踏み固められていないのは、第23 B号竪穴建物跡構築時に削平されたか、使用期間が短かったことによると思われる。本跡の柱は抜き取られ、すぐに埋め戻されている。その後、本竪穴を利用して、第23 B号竪穴建物が建てられている。本建物の廃絶と第23 B号竪穴建物への建替えは短期間に行われたと思われる。このことから、本跡の時期は、第23 B号竪穴建物跡と同時期の5世紀中葉と考えられる。

### 第23 B号竪穴建物跡（第7～11図）

調査年度 平成24年度

位置 調査区北西部のA2h0区、標高24mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第23 A号竪穴建物跡を埋め戻し、四方に拡張して、構築している。

規模と形状 長軸8.54m、短軸8.46mの方形で、主軸方向はN-26°-Wである。第23 A号竪穴建物跡と比べると2°西へ振れている。壁は高さ44～50cmで、ほぼ直立している。

床 壁周辺はほぼ平坦で、炉1の西側が踏み固められている。中央部は第23 A号竪穴建物跡の貼床面と同じであるが、あまり踏み固められていない。南西コーナー部に位置する貯蔵穴1の周辺は、床面から5cmほど高くなっており、焼土塊や炭化材が確認されている。壁下には壁溝が巡っている。

炉 2か所。炉1は北壁寄りのほぼ中央に付設されている。長径114cm、短径72cmの楕円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床面は浅く掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は西部や北寄りに付設されている。長径62cm、短径46cmの楕円形で、深さ4cmの地床炉である。炉床面は浅く掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。



#### 炉 1 土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

2 灰 赤 色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ48～96cmで、配置から主柱穴である。P2の底面では柱の当りが確認できた。P2では柱抜き取り痕が確認でき、P1～P4は柱が抜き取られた後、ロームブロックを多量に含む暗褐色土や黄褐色土で埋め戻されている。P5は深さ17cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ18cmで、性格は不明である。

#### P1土層解説

1 暗 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

#### P4土層解説

1 黒 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・黒色粒子微量

#### P2・P3土層解説

1 にぶい褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物少量

2 にぶい褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

2 暗 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

3 黄 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

3 黄 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

4 黒 灰色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

覆土 15層に分層できる。壁際と中央部下層の第5～15層は、ロームブロックを多量に含む不規則な堆積状況であることから、埋め戻されている。南西コーナー部の焼土塊や炭化材は、覆土下層から床面にかけて確認できており、本跡がある程度埋め戻されてから焼失したと思われる。第4層は周囲から流入した堆積状況から、自然堆積である。床面下の第16・17層は貼床で、第23A号堅穴建物跡の掘方を埋めているロームブロックを多量に含む貼床の構築土である。

#### 土層解説

1 灰 褐色 砂粒少量、ローム粒子微量（住宅地整地土）

10 褐 色 ロームブロック多量、炭化物・焼土粒子・黒色粒子少量

2 灰黄褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量（住宅地整地土）

11 黄 褐色 ロームブロック多量、炭化物・黒色粒子少量、焼土粒子微量

3 にぶい褐色 ロームブロック・砂粒少量（住宅地整地土）

12 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

4 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

13 にぶい褐色 ロームブロック多量

5 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

14 暗 褐色 ロームブロック少量

6 黒 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

15 明黄褐色 ロームブロック多量

7 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

16 にぶい褐色 ロームブロック多量、炭化粒子・黒色粒子少量

8 にぶい褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

17 明 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子微量

9 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部に位置している。長軸106cm、短軸96cmの隅丸方形で、深さは65cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。底面から3の埋下半部片と30の甕底部片が出土している。破片であることから遺棄されたものと思われる。覆土下層は東側から、覆土中層は西側から白色粘土、ロームブロックを含む灰褐色土などで埋め戻されている。貯蔵穴2は、北東コーナー部に位置している。長径84cm、短径64cmの楕円形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。覆土は東側からロームブロックや炭化粒子を含む褐色土が堆積していることから、埋め戻されている。覆土には焼土ブロックや炭化材は混入しておらず、貯蔵穴が埋まってから上層が焼失したと思われる。

#### 貯蔵穴1土層解説

1 褐色 ロームブロック・炭化物少量

#### 貯蔵穴2土層解説

1 褐色 ロームブロック多量、炭化物少量

2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

2 灰黄褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

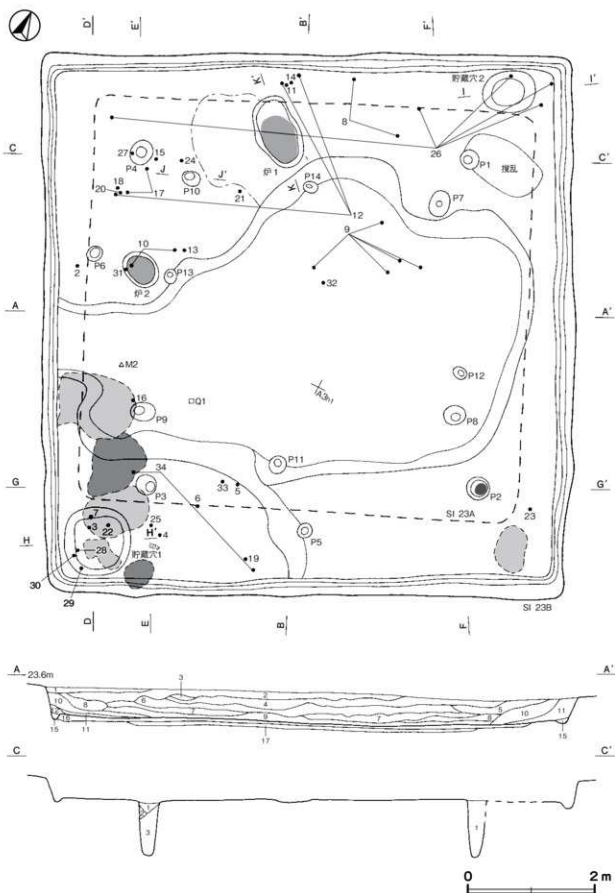
3 灰褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量

4 灰褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量

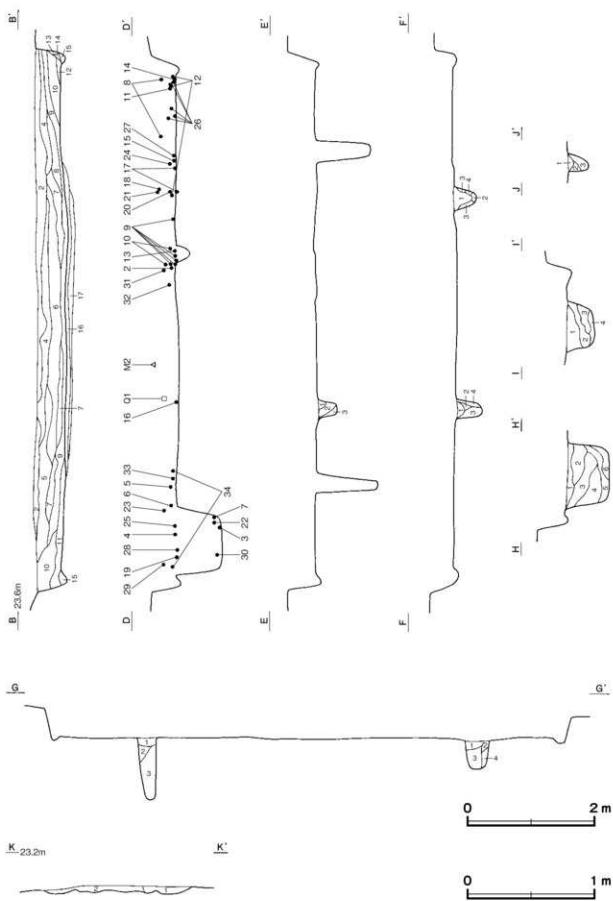
4 暗褐色 ロームブロック中量

5 黒褐色 ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量

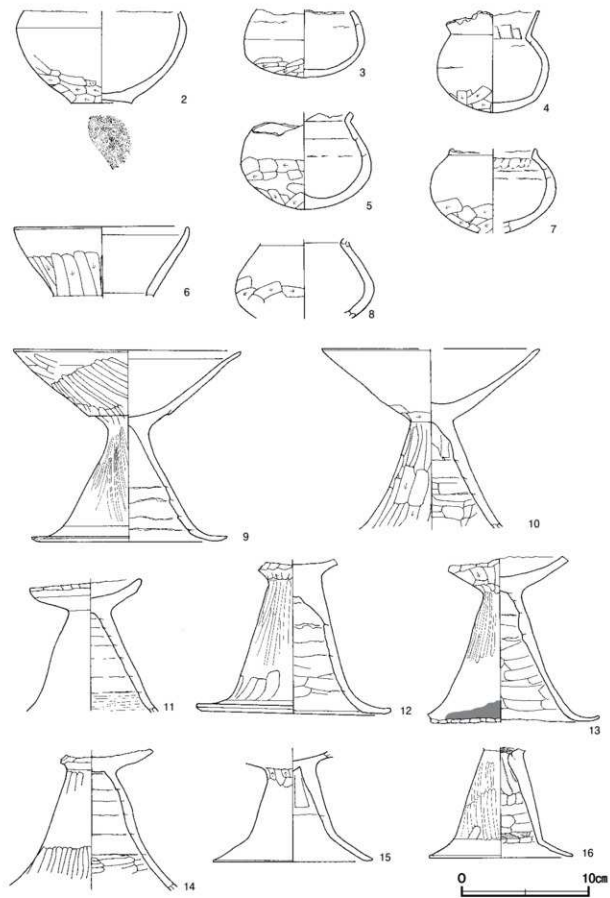
6 灰黄褐色 ロームブロック中量、白色粘土ブロック少量



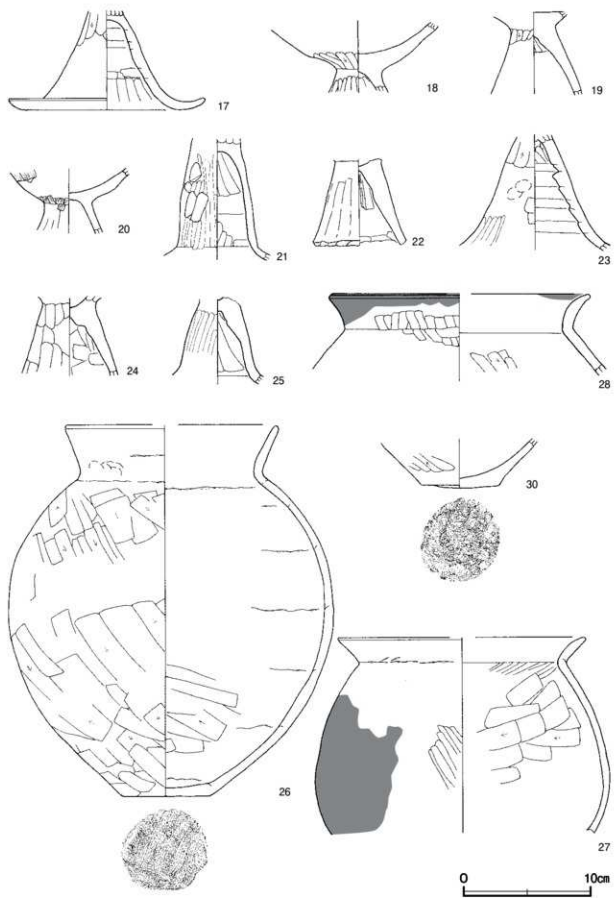
第7图 第23A·B号竖穴建物跡实测图(1)



第8图 第23A·B号竖穴建物跡实测图(2)



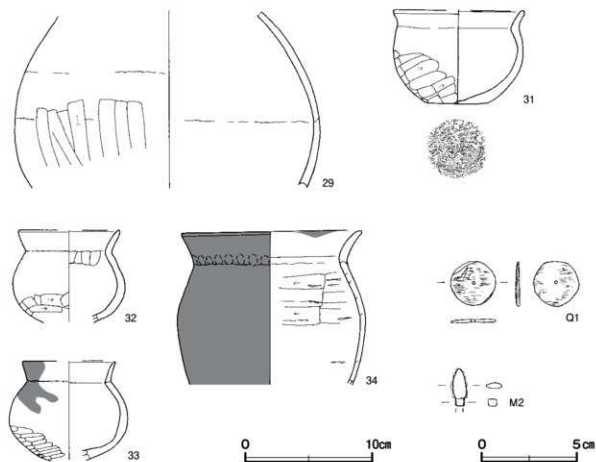
第9图 第23B号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第10图 第23B号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

**遺物出土状況** 土師器片702点(碗類134, 埴6, 高坏94, 甕類468), 石製品1点(有孔円板), 鉄製品1点(鏃)が, 壁寄りの覆土中層から床面にかけて出土している。13・15～17・25は破片で, 床面から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものとみられる。9・12・26・34は覆土下層と床面から出土した破片が接合しており, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。Q1・M2は西壁寄りの覆土中層から出土しており, 土師器片とともに流れ込んだものと思われる。

**所見** 本跡は第23A号竪穴建物からの建替えが確認できた。第23A号竪穴建物の柱を抜き取った後, 柱穴を埋め戻し, 周囲を拡張して, 構築されている。本跡は床があまり踏み固められておらず, 長期間は使用されなかったと思われる。不必要な土器は遺棄され, 柱を抜き取った後, 柱穴や壁周辺は埋め戻されている。その後, 上屋や廃材が燃やされた焼失建物跡である。時期は出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第11図 第23B号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第23B号竪穴建物跡出土遺物観察表(第9～11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	埴	-	(72)	[48]	長石・石英・燧石・赤色粒子	橙	普通	体部外面中位へラナテ 体部外面下位へラナテ	覆土下層	25% 柄に転用
3	土師器	埴	-	(53)	-	長石・石英・燧石	橙	普通	胎口唇方調整 口縁部外・内面横ナテ 体部外面下位へラナテ 輪郭み風	貯蔵穴底面	90% PL8 柄に転用
4	土師器	埴	-	(81)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胎口唇部入系調整 口縁部外面横ナテ 内面へラナテ 体部外面上位置ナテ 下位へラナテ	南西コーナー部 底面	90% PL8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土師器	埴	-	(7.8)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	頸口周りを調整 体部外面上位ヘラナゲ 下位ヘラナゲ 内面輪轆み痕	北西寄り 覆土下層	70% PL8
6	土師器	埴	136	(3.6)	-	長石・石英	淡黄	普通	口縁部外・内面ナゲ 胴部外面ヘラナゲ	覆土下層	30%
7	土師器	埴	-	(7.7)	-	長石・石英	にぶい赤黒	普通	頸口周りを調整 体部外面下位ヘラナゲ 内面指押圧印 輪轆み痕	防藏穴1 覆土中層	40%
8	土師器	埴	-	(6.2)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面下位ヘラナゲ	覆土中層	20%
9	土師器	高坏	181	153	155	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	坏部外面ヘラナゲ 接合部ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ 内面輪轆み痕	中央から 北東寄り床面	50% PL10
10	土師器	高坏	(172)	(14.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外・内面ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ 内面長押圧印 輪轆み痕	覆土下層	60%
11	土師器	高坏	8.7	(10.6)	-	長石・石英・小礫	橙	普通	頸口周りを調整 胴部外面ヘラナゲ 内面輪轆み痕	北東寄り 覆土下層	60% PL9 器台に転用
12	土師器	高坏	-	(12.3)	156	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	頸口周りを調整 接合部ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印 輪轆み痕	覆土下層	50% 器台に転用
13	土師器	高坏	9.5	132	137	長石・石英・黒色粘土	橙	普通	頸口周りを調整 接合部指押圧印 胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印 輪轆み痕	中央から 西寄り床面	60% PL9 器台に転用
14	土師器	高坏	-	(11.1)	-	長石・石英	橙	普通	頸口周りを調整 胴部外・内面ヘラナゲ 内面輪轆み痕	覆土下層	30% 器台に転用
15	土師器	高坏	-	(8.7)	128	長石・石英	橙	普通	接合部ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印 輪轆み痕	覆土下層	50%
16	土師器	高坏	-	(8.7)	115	長石・石英・雲母	橙	良好	胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印・ヘラナゲ 輪轆み痕 胴部外・内面ナゲ	南西寄り 床面	45%
17	土師器	高坏	-	(7.8)	156	長石・石英	明赤黒	普通	胴部外面ヘラナゲ 内面ヘラナゲ・輪轆み痕	北西寄り 床面	40%
18	土師器	高坏	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外・内面ヘラナゲ 接合部ヘラナゲ 胴部外・内面ヘラナゲ	覆土中層	20%
19	土師器	高坏	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	接合部ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印	南東寄り 床面	20%
20	土師器	高坏	-	(5.2)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	坏部外面ナゲ目 内面指押圧印 接合部ヘラナゲ 胴部外面ヘラナゲ	北西寄り 床面	20%
21	土師器	高坏	-	(9.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面ヘラナゲ 内面指押圧印 輪轆み痕 胴部外面ナゲ	覆土中層	20%
22	土師器	高坏	-	(6.9)	-	長石・石英	橙	普通	胴部外・内面ヘラナゲ 胴部下端人為割線	覆土中層	30%
23	土師器	高坏	-	(9.1)	-	長石・石英・雲母・小礫	橙	普通	胴部外面上位ヘラナゲ 下位ヘラナゲ 内面指押圧印 内面輪轆み痕	覆土下層	15%
24	土師器	高坏	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	胴部外・内面ヘラナゲ 内面指押圧印	覆土下層	20%
25	土師器	高坏	-	(6.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面ナゲ目 内面指押圧印	南西コーナー部 北東寄り	25%
26	土師器	甕	167	29.5	8.6	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面ナゲ 胴部外面指押圧印 体部外・内面ヘラナゲ 底面ナゲ目 輪轆み痕	北東寄り 覆土下層	50% PL11
27	土師器	甕	[196]	(15.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	良好	口縁部外・内面ナゲ 体部外面ヘラナゲ 一部腐り 口縁部・内面ナゲ 体部外面ナゲ	覆土下層	15%
28	土師器	甕	[202]	(5.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ナゲ 体部外面ヘラナゲ 内面一部ヘラナゲ 口唇部・口縁部 一部腐り	防藏穴1 覆土上層	10%
29	土師器	甕	-	(14.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面上位ヘラナゲ 下位ヘラナゲ 内面ヘラナゲ 輪轆み痕	覆土中層	40%
30	土師器	甕	-	(3.9)	6.2	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラナゲ 内面ヘラナゲ	防藏穴1 覆土下層	10%
31	土師器	小形甕	[104]	7.4	4.8	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面ヘラナゲ 内面ヘラナゲ	内東寄り 覆土中層	40% PL10
32	土師器	小形甕	[8.0]	(7.3)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面下位ヘラナゲ 体部外面上位ヘラナゲ	覆土下層	40%
33	土師器	小形甕	[7.4]	(7.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ヘラナゲ 体部下位ヘラナゲ 内面ヘラナゲ 内面一部腐り	覆土下層	20%
34	土師器	小形甕	14.3	(12.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナゲ 胴部外面指押圧印 体部内面ヘラナゲ 輪轆み痕 腐り	覆土下層	50% PL10

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	有孔円板	2.4	0.2	0.15	2.13	滑石	両面平滑 全面研磨調整 孔1か所	覆土中層	PL12

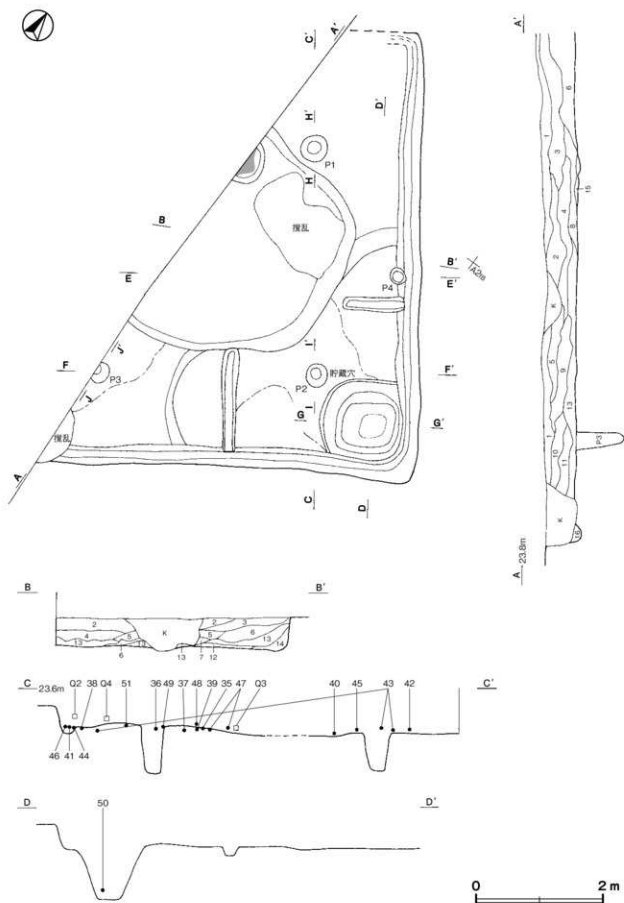
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	織	(295)	132	0.76	(382)	鉄	柳葉形短頭織 直角側 胴部断面長方形 基部欠損	覆土中層	PL12

## 第24号竪穴建物跡 (第12～16区)

調査年度 平成24年度

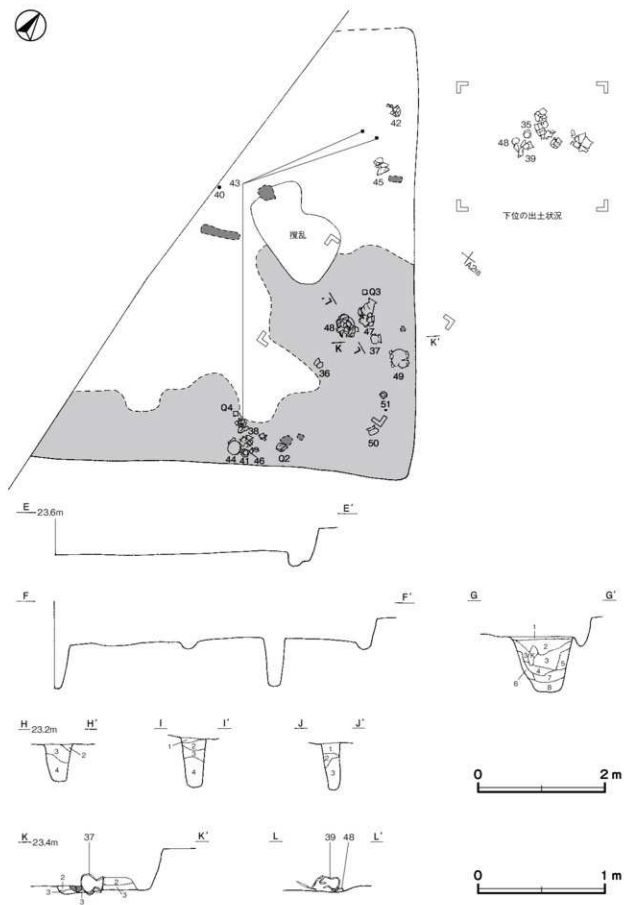
位置 調査区北西部のA27区、標高23mほどの台地端部に位置している。

規模と形状 西半部が調査区域外へ延びているため、東半部の確認である。南北軸は7.14mで、東西軸は5.90mしか確認できなかった。長方形あるいは方形で、主軸方向はN-34°-Wと推測される。壁は高さ30～35cmで、ほぼ直立している。



第12图 第24号竖穴建物跡实测图(1)





第13図 第24号竪穴建物跡実測図(2)

**床** 北部はほぼ平坦で、南部は凹凸がある。南西部と貯蔵穴周辺が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。中央部に径3.60mのほぼ半円形を呈する掘り込みが確認できた。深さ3～6cmで、本跡の掘方の可能性がある。南東コーナー部は地山のローム土を掘り残し、3～6cm高くなっている。この高まり部隅の貯蔵穴を囲む位置に、間仕切り溝が2条確認できた。中央から南東部の広い範囲に焼土層が確認できた。

**炉** 西半部は調査区域外へ延びている。中央からやや北寄りに付設されており、長径76cm、短径64cmの楕円形と推測され、深さ5cmの地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめ、覆土の第15層を埋土して構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 4か所。P1～P3は深さ58～76cmで、配置から主柱穴である。P1～P3は柱が抜き取られている。覆土下層に焼土粒子が含まれていることから、上屋焼失時には開口していたと思われる。P4は深さ14cmで、性格は不明である。

#### P1・2土層解説

- 1 黄 褐色 ロームブロック多量、炭化物少量
- 2 黄 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 3 褐 灰色 ロームブロック多量、ローム粒子少量
- 4 褐 灰色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

#### P3土層解説

- 1 にふい青褐色 ロームブロック多量、黒色粒子少量
- 2 褐 灰色 ロームブロック・黒色粒子中量
- 3 黒 褐色 ロームブロック多量、黒色粒子中量、焼土粒子少量

**貯蔵穴** 南西コーナー部に位置している。長軸106cm、短軸96cmの隅丸方形である。深さは90cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。覆土下層の第8層には焼土ブロックが中量含まれており、上屋焼失時は開口しており、その後、ロームブロックなどを含む層で埋め戻されたと思われる。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 2 にふい青褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 黒 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 5 褐 灰色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 7 にふい青褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物少量
- 8 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量

**覆土** 16層に分层できる。焼土ブロックを多量に含んでいる第13層が、床面から壁際にかけて厚さ5～20cmで堆積している。柱穴や貯蔵穴の覆土に焼土が混入していることから、柱穴や貯蔵穴が開口している状態で、廃材や上屋を燃焼させたと考えられる。炭化物やロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第15層は炉の構築土である。

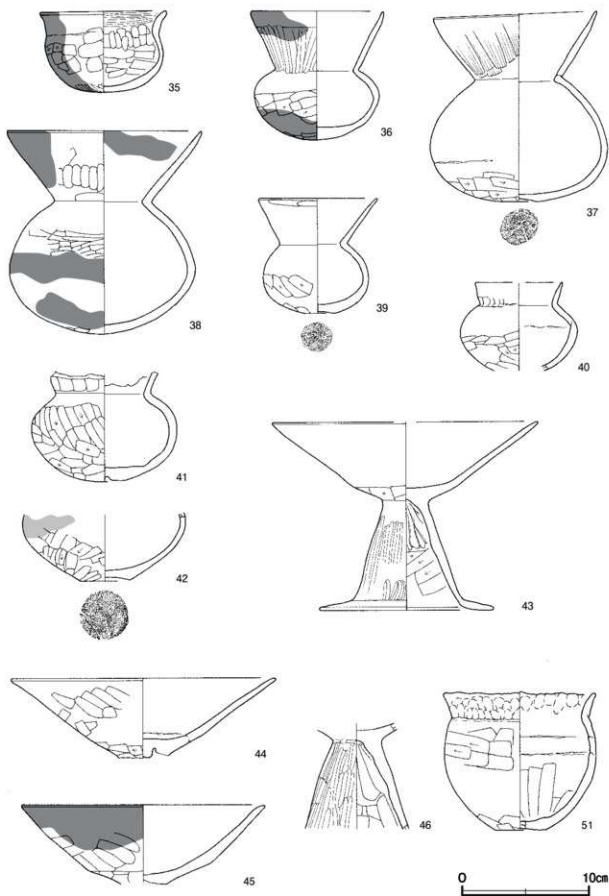
#### 土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰 黄褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 5 にふい青褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 7 褐 色 ロームブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 黒 褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 9 にふい青褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 10 にふい青褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 にふい青褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 暗 褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 14 にふい青褐色 ロームブロック中量、黒色粒子少量
- 15 赤 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 16 暗 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

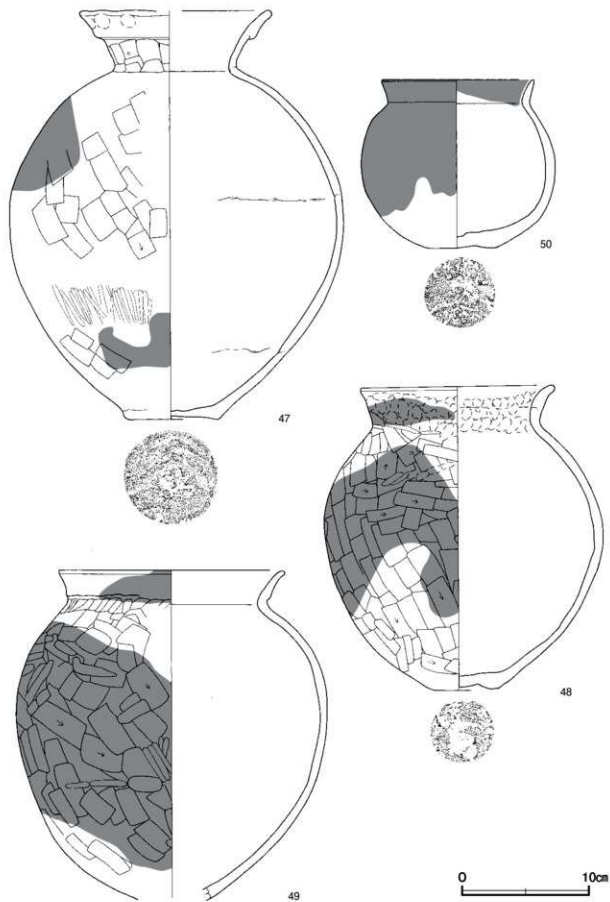
**遺物出土状況** 土師器片452点(輪埴2, 埴58, 高坏127, 甕類265)、石器2点(砥石・台石)、石製品1点(白玉)が、床面や焼土ブロックを多量に含む第13層の広範囲から出土している。焼土の層厚は南東コーナー部が特に厚い。床面に遺棄された35・38・42・45・47～49、貯蔵穴の底面から出土した50などは、上屋や廃材の焼失により、外面に煤が付着している。南東コーナー部では、外面に煤が付着していない37・39・41の埴が焼土層の間から確認されている。37の底部側には白色粘土ブロックが土器を支えるように置かれ、41のそばからは44の高坏が、39の下からは47の壺体部片がそれぞれ出土している。このことから、上屋焼失後、焼土層を掘り込み、高坏や土器片の上に埴を供え、祭祀的行為がなされたものと考えられる。

#### 土器出土状況図土層解説

- 1 灰 白色 白色粘土ブロック多量
- 2 暗 褐色 焼土ブロック多量(焼土層)
- 3 暗 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

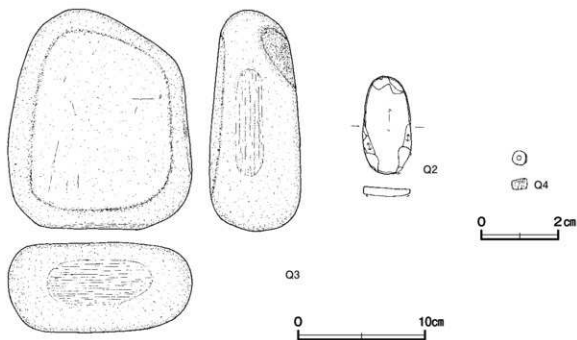


第14图 第24号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第15图 第24号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

所見 本跡は本柱が抜かれた後、多くの土器を遺棄したまま、上屋や廃材が燃やされた焼失建物跡である。その後、高坏や土器片の上に堆を供えた行為が想定される。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第16図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第24号竪穴建物跡出土遺物観察表(第14~16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師器	鉢	100	6.3	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ割り 内面指押押圧・ヘラ割り 外面保付着	南東コーナー部 底面	80% PL.8
36	土師器	埴	10.5	10.2	-	長石・石英・黒色粒子	灰黄緑	良好	口縁部外・内面横ナデ 器部外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ割り 外面保付着	南東コーナー部 底面	100% PL.9
37	土師器	埴	12.9	15.1	3.0	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部外面ヘラ目 横ナデ 口縁部内面横ナデ 体部外面ヘラナデ ヘラ割り	南東コーナー部 底面	90% PL.9
38	土師器	埴	15.4	16.1	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 器部ナデ 体部外面上段ヘラ磨き 外・内面保付着	南東コーナー部 底面	90% PL.9
39	土師器	埴	9.6	9.1	2.4	長石・石英	にぶい黄	良好	口縁部外・内面横ナデ 器部指ナデ 体部外面ヘラ割り	南東コーナー部 底面	70% PL.9
40	土師器	埴	[6.9]	[7.0]	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	良好	口縁部外・内面ヘラナデ 器部外面ヘラ押圧 体部下位外面ヘラ割り 輪積み痕	中央部床面	70% PL.8
41	土師器	埴	-	[8.6]	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ割り 口唇部人為的凹 底面磨り	南東コーナー部 底面	80% PL.8
42	土師器	埴	-	[5.3]	3.9	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	体部下位外面ヘラ割り 内面ナデ 外面保付着	南東下層	30%
43	土師器	高坏	[21.1]	14.9	13.8	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄	普通	坏部外・内面指押圧 接合部ヘラ割り 脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラ割り	北東コーナー部 底面	65% PL.10
44	土師器	高坏	20.9	16.3	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色顔料	橙	普通	坏部外・内面ヘラナデ 接合部ヘラ割り 脚部内面指押圧・ヘラ割り 輪積み痕	南東コーナー部 底面	50% 環上・粘用
45	土師器	高坏	19.4	16.3	-	長石・石英	にぶい黄	普通	坏部外・内面指押圧 接合部ヘラ割り 外面保付着	南東下層	50%
46	土師器	高坏	-	18.3	-	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指押圧・ヘラ割り	南東コーナー部 底面	20%
47	土師器	壺	[15.0]	32.4	7.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄	普通	口縁部外・内面ナデ 器部ヘラナデ 体部外面ヘラ割り 内面輪積み痕 外面保付着	南東コーナー部 底面	50% PL.11
48	土師器	壺	15.2	24.2	4.8	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ割り 外面保付着 口縁部外・内面指押圧	南東コーナー部 底面	90% PL.11
49	土師器	壺	17.8	[26.2]	-	長石・石英	黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部ヘラ割り 体部内面ヘラ割り 外面保付着	南東コーナー部 底面	70% PL.11
50	土師器	小形壺	11.9	13.3	5.5	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 外・内面保付着	貯蔵穴底面	95% PL.11
51	土師器	小形壺	12.0	10.8	[4.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部外・内面指押圧 体部外・内面ヘラ割り 輪積み痕	南東コーナー部 底面	45% PL.10

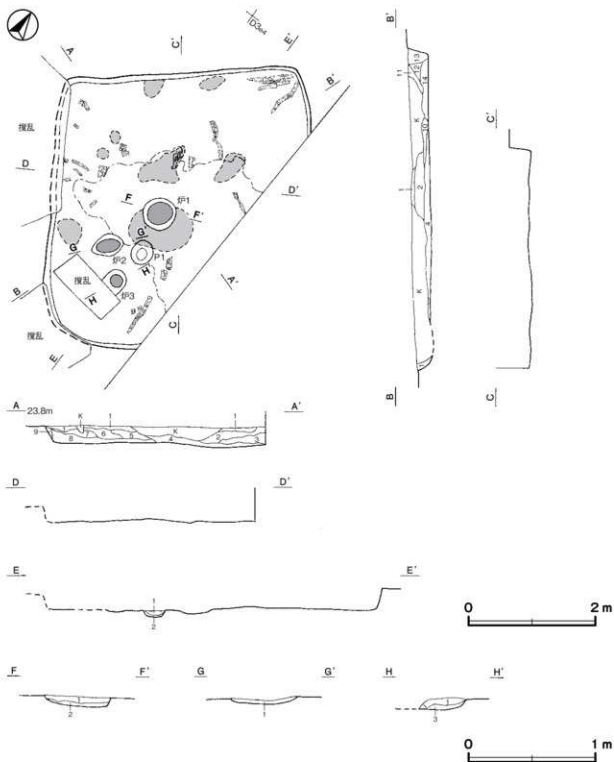
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	7.8	4.0	[0.8]	[35.97]	粘板岩	砥面1面 側面磨り調整 断面長方形	南東下層	PL.12
Q3	白石	17.7	14.6	7.2	3005.0	砂岩	上面・4側面磨面	南東下層	PL.12
Q4	白玉	0.4	0.3	0.1	0.07	滑石	側面が直線的な円筒状 一方からの穿孔	南東下層	PL.12

第25号竪穴建物跡 (第17図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区南部のD3e4区、標高24mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 東コーナーが調査区域外へ伸び、北面と南部は、床面近くまで大きく攪乱されている。長軸4.35m、短軸4.09mの方形で、主軸方向はN-35°-Wと推測される。壁は高さ23~35cmで、ほぼ直立している。



第17図 第25号竪穴建物跡実測図

**床** 中央部がわずかに高く、踏み固められている。焼土塊や炭化材（丸材、半截丸材）が、床面全体から放射状に出土している。

**炉** 3か所。炉1は中央からやや西寄りに付設されており、径50cmほどの円形である。深さ8cmの地床炉で、炉床面は浅く掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は中央から南西寄りに付設されており、長径52cm、短径38cmの楕円形である。深さ10cmの地床炉で、炉床面は浅く掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。炉3は中央から南西コーナー寄りに付設されており、南西部は攪乱されている。長径72cm、短径35cmの楕円形と推測される。深さ17cmの地床炉で、炉床面は浅く掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。

**炉1・炉2・炉3土層解説**

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物少量 | 3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |                        |

**ピット** P1は中央から南西寄りに確認され、深さ10cmである。覆土に焼土粒子や炭化物が含まれていることから、上屋焼失時は、開口していたと思われる。性格は不明である。

**P1土層解説**

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 2 褐色 ロームブロック多量、炭化物少量 |
|--------------------------|----------------------|

**覆土** 14層に分層できる。最下層の第4層は、焼土ブロック・焼土粒子が多量に含まれており、上屋焼失時に形成された層と思われる。第4層の上層は炭化物・ロームブロックを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                                     |                             |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量          | 8 暗褐色 焼土粒子多量、ロームブロック・炭化物微量  |
| 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、焼土ブロック少量 | 9 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量       |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量          | 10 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量     |
| 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量、炭化物中量       | 11 暗褐色 ロームブロック中量            |
| 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量       | 12 黒褐色 ロームブロック多量            |
| 6 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量        | 13 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 |
| 7 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量          | 14 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量        |

**遺物出土状況** 土師器片142点（埴9、高坏38、甕類95）が、覆土中から出土している。いずれも細片で図示できない。

**所見** 本跡は柱穴が明確でない小型の建物跡である。炉が3か所確認され、位置が中央から南寄りであることなど、他の建物跡の状況とは異なっている。炭化材は丸材が多く、中央に向かうような形で確認されていることから、垂木などの屋根細材と思われる。また、屋根の構造部材が一面に見られることから、焼失建物跡と考えられる。時期は出土土器から5世紀中葉と考えられる。

**第26号竪穴建物跡（第18図）**

**調査年度** 平成25年度

**位置** 調査区南西部のD2c4区、標高23mほどの台地端部に位置している。

**重複関係** 第78号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 西部の大半が調査区域外へ延びているため、南東コーナー部だけの確認である。現存しているのは、東壁4.26m、南壁2.54mで、主軸方向はN-28°-Wと推測される。壁は16～20cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、あまり踏み固められてはいない。東壁際で焼土塊が3か所確認できた。

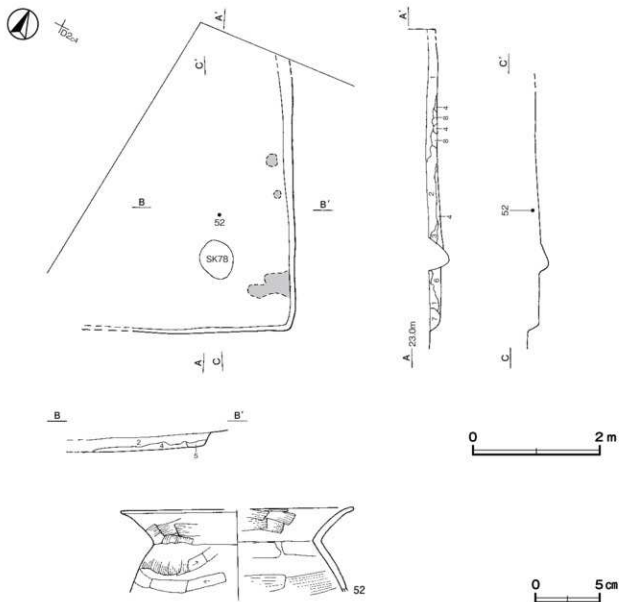
**覆土** 8層に層分できる。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されてる。

**土層解説**

- |       |                         |       |                         |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 1 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量   | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量   |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量   | 6 黄褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量        |
| 4 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量   |

**遺物出土状況** 土師器片24点(椀類1, 埴2, 高坏3, 甕類18)が、南東コーナー付近の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第18図 第26号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第26号竪穴建物跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師器	甕	[18.4]	(66)	-	長石・石英・雲母	にぶい色	普通	口縁部外・内面横子ナ・ハケ目 ヘラ削り・ハケ目	体部外・内面	覆土下層 20%



## 第 27 号竪穴建物跡 (第 19～21 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区南部の D 3 区、標高 24 m ほどの台地端部に位置している。

規模と形状 長軸 7.52 m、短軸 7.42 m の方形で、主軸方向は N-8°-W である。壁は高さ 24～34 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、炉 1・炉 2・炉 3 の南側から東壁にかけて、踏み固められている。南東コーナー部は、地山のローム層を掘り残し、4～6 cm ほど高くなっている。中央から南部では、層厚 3～6 cm のにぶい黄褐色土による貼床が確認できた。炭化材(丸材・角材・板材)が、中央部から北壁寄りにかけて、中央に向かう状態で出土している。南壁寄りの焼土塊は、貼床上に南北 1.40 m、東西 1.75 m の範囲に、3～10 cm の厚さで出土している。壁溝が南東コーナー部にだけ確認できた。

### 焼土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

炉 4 か所。炉 1 は、中央からやや北寄りの炉 2 に接して付設されている。長径 90 cm、短径 62 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめて構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉 2 は、炉 1 に接して付設されている。長径 98 cm、短径 76 cm の楕円形で、深さ 6 cm の地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめて構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉 3 は、中央からやや北寄りの炉 2 のそばに付設されている。長径 46 cm、短径 40 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめて構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉 4 は、中央からやや東寄りに付設されている。長径 46 cm、短径 38 cm の楕円形で、深さ 10 cm の地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめて構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

### 炉 1 土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物中量

### 炉 2 土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子中量

### 炉 3 土層解説

- 1 褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化物少量

### 炉 4 土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量

ピット 4 か所。P 1 は深さ 42 cm、P 2 は深さ 36 cm で、配置から主柱穴である。P 3 は深さ 42 cm で、中央方向へ斜めに掘り込まれており、位置や形状から出入口施設に伴うピットである。P 4 は深さ 21 cm で、位置から補助柱穴である。P 1～P 4 の覆土中には、焼土ブロック・焼土粒子が含まれており、上屋焼失時には柱が抜き取られ、開口していたと思われる。

### P 1 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 焼土ブロック多量

### P 2 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物少量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

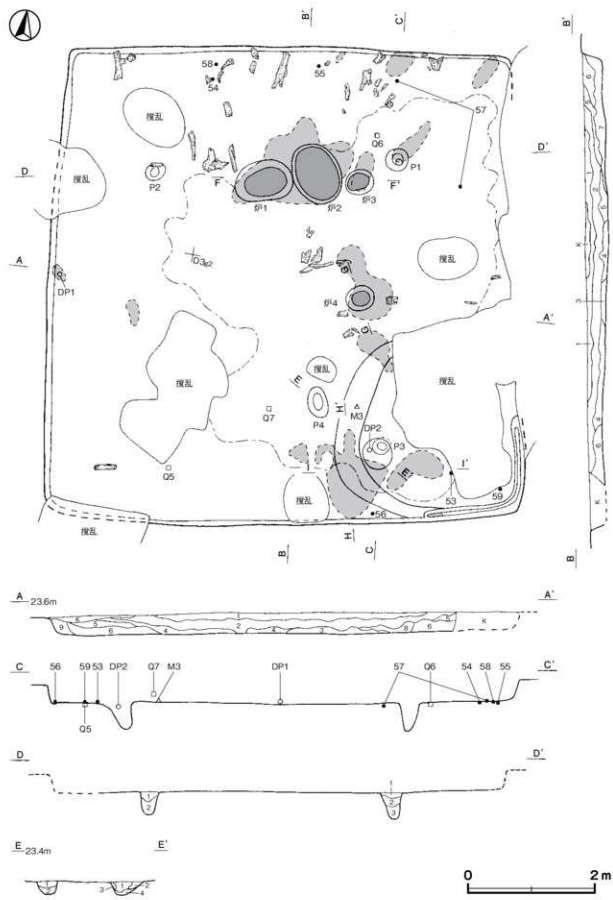
### P 3 土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物中量

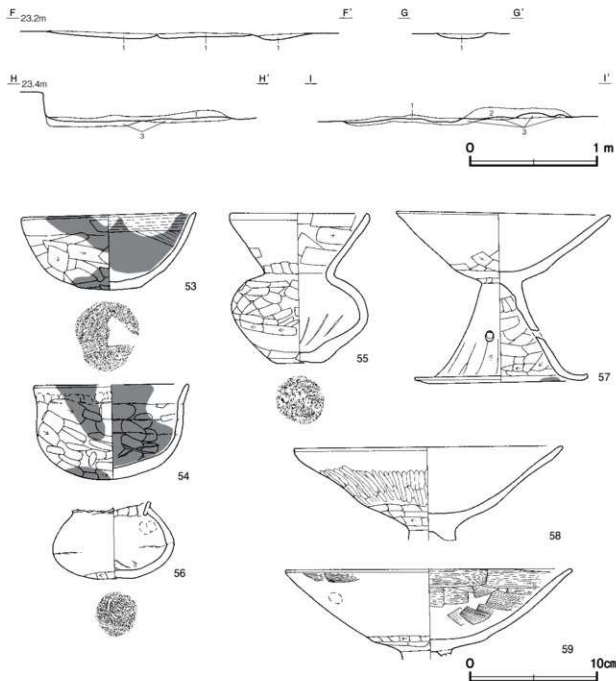
### P 4 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック多量

覆土 9 層に分層できる。下層はロームブロック・焼土ブロックを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。中・上層は黒褐色土、黒色土がレンズ状に堆積した自然堆積である。第 9 層は上屋が焼失した際の焼土層である。



第 19 图 第 27 号竖穴建物跡实测图



第20図 第27号竪穴建物跡・出土遺物実測図

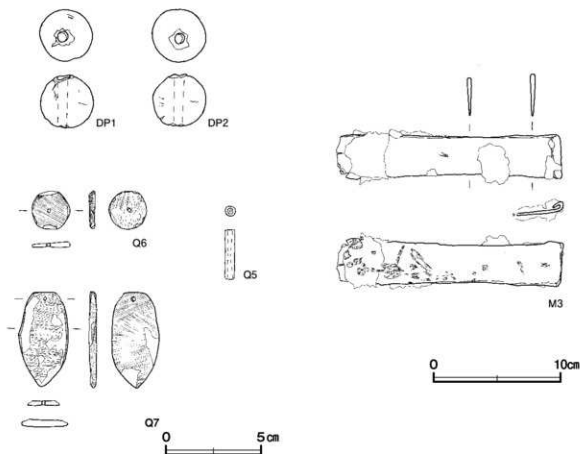
土層解説

- |       |                           |       |                           |
|-------|---------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量      | 6 黒褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量      |
| 2 黒色  | 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量    | 7 褐色  | ロームブロック多量, 炭化物微量          |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量    | 8 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量    |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 5 褐色  | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |       |                           |

遺物出土状況 土師器片 990点(椀類 84, 埴 85, 高坏 218, 甕類 603), 土製品 2点(土玉), 石製品 3点(管玉, 有孔円板, 剣形品), 鉄製品 1点(鎌)が, 覆土下層から床面にかけて広範囲に出土している。53～59は床面から出土し, 53・54の椀と57の高坏には煤が付着しているが, 55・56・58・59の埴と高坏には, 煤の付着が見られない。このことから, 55・56・58・59は, 上層焼失後に建物跡内に持ち込まれたものと考えられる。

DP 2・Q 5・Q 6・M 3は床面から、DP 1・Q 7は覆土下層からそれぞれ出土している。DP 2・Q 5・Q 6・M 3は床面に遺棄されたもの、DP 1・Q 7は流れ込みと思われる。

所見 本跡は柱が抜かれた後、間もなく上屋や廃材が燃やされた焼失建物跡である。高坏や埴は焼失後に持ち込まれ、何らかの行為がなされたものと思われる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第21図 第27号堅穴建物跡出土遺物実測図

第27号堅穴建物跡出土遺物観察表 (第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師器	碗	138	60	46	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目 体部外面ヘウ張り 外・内面僅付き	高東コーナー部 北東	85% PL.8
54	土師器	碗	[122]	75	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 前面押圧 体部外・内面ヘウ張り 輪軸みね 外・内面僅付き	北東部床面	60% PL.8
55	土師器	埴	108	120	39	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘウ張り	北東部床面	96% PL.9
56	土師器	埴	-	(60)	34	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部外・内面ヘウ張り 体部下葉ヘウ張り 内面控面押圧・輪軸みね	南東部床面	20%
57	土師器	高坏	168	137	138	長石・石英・雲母・赤色砂子	浅黄橙	普通	坏部外・内面横ナデ 複合部ヘウ張り 胴部外・内面ヘウ張り・2部 胴部内面僅付き	北東コーナー部 北東	96% PL.10
58	土師器	高坏	212	(74)	-	長石・石英・雲母 黒色砂子	橙	普通	胴部外・内面横ナデ 坏部外面下位ヘウ張り 複合部ヘウ張り	北西コーナー部 北東	40%
59	土師器	高坏	227	(72)	-	長石・石英・雲母 黒色砂子	明赤黄	良好	口縁部内・外面ハケ目 複合部ヘウ張り 外面控面押圧	高東コーナー部 北東	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	28	28	0.5	1675	長石・石英	にぶい橙	ナデ 一方からの穿孔	西東部 覆土下層	PL12
DP 2	土玉	28	27	0.5	1818	長石・石英	にぶい橙	ナデ 一方からの穿孔	南東部 北東	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	碧玉	260	050	050	124	緑泥片岩	全面研磨調整 両方からの穿孔 孔径0.30cm	南西コーナー部 玉座	PL12
Q 6	有孔円板	201	197	028	206	滑石	両面平滑 全面研磨調整 孔1か所 孔径0.15cm	中央から 北東寄り床面	PL12
Q 7	刷形品	510	260	040	857	滑石	全面研磨調整 一方からの穿孔 孔径0.15cm	覆土中層	PL12

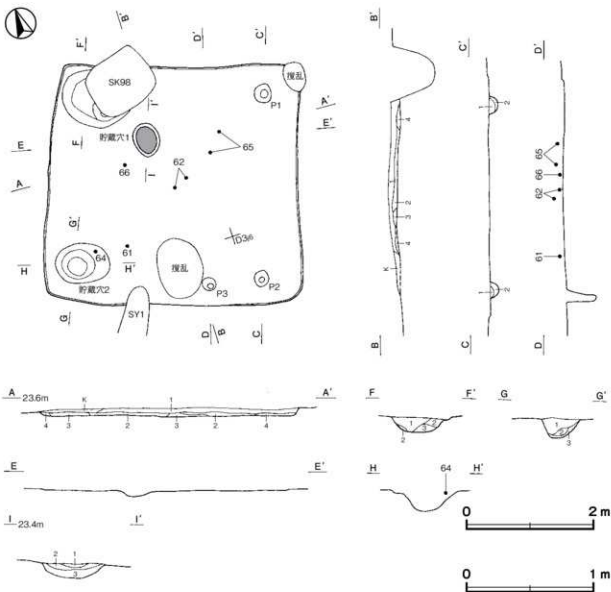
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	鎌	(180)	3.6	01~04	(87.89)	鉄	短冊形直方鎌 基部装着のための折り返し 両面木質付着	中央から 南東寄り床面	PL12

## 第 28 号竪穴建物跡 (第 22・23 図)

調査年度 平成 20 年度

位置 調査区南部の D 3 区、標高 23 m ほどの台地端に位置している。

重複関係 第 1 号炭焼窯、第 98 号土坑に掘り込まれている。



第 22 図 第 28 号竪穴建物跡実測図

**規模と形状** 長軸 3.98 m, 短軸 3.77 m の方形で, 主軸方向は N - 18° - E である。壁は最高 5 cm で, 外傾している。

**床** 平坦であり踏み固められてはいない。

**炉** 中央からやや北西寄りに付設されている。長径 52cm, 短径 46cm の楕円形で, 深さ 12cm の地床炉である。炉床を掘りくぼめ, 褐色土を埋土して構築されており, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**炉土層解説**

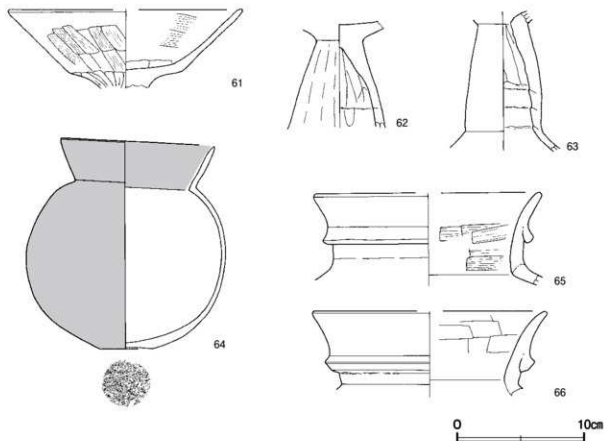
- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量      3 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量  
2 赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量

**ピット** 3か所。P 1 は深さ 16cm, P 2 は深さ 27cm で, 配置から柱穴と思われる。P 3 は深さ 50cm で, 位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土は, ロームブロックを含む層で埋め戻されている。

**P 1・2土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量      2 褐色 ロームブロック中量

**貯蔵穴** 2か所。貯蔵穴 1 は北西コーナー部に位置しており, 北東部を第 98 号土坑に掘り込まれている。長径 110cm, 短径 86cm の楕円形と推測される。西部の深さは 26cm で, 底面はほぼ平坦である。南東部には深さ 10cm のピットが確認できたが, 大部分を第 98 号土坑に掘り込まれており, 性格は不明である。壁は外傾している。貯蔵穴 2 は, 南西コーナー部に位置している。長径 87cm, 短径 64cm の楕円形で, 深さ 32cm である。底面は平坦で, 壁は外傾している。覆土は, ともにロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物などが含まれている層で, 埋め戻されている。



第 23 図 第 28 号堅穴建物跡出土遺物実測図

## 貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

## 貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロック、炭化物、焼土粒子などが含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

## 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片 650点（椀類 82、埴 83、高坏 217、甕類 268）が、覆土中層を中心に広範囲に出土している。すべて破片で、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

**所見** 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。

## 第28号竪穴建物跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	土師器	高坏	[184]	(6.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	外部外面上位横ナデ 下位ヘラ割り、ハケ目 内面横ナデ・ハケ目 接合部ヘラ割り	覆土中層	25%
62	土師器	高坏	-	(8.4)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	脚部外面ヘラ割り 内面指押圧 輪積み痕	覆土下層	30%
63	土師器	高坏	-	(10.1)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	脚部外面ヘラナデ 内面指押圧 輪積み痕	覆土中	20%
64	土師器	甕	11.9	16.7	3.9	長石・石英・雲母	にぶい暗赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ナデ 外面全面から口縁部内面赤刷	貯蔵穴 覆土上層	80% PL11
65	土師器	甕	[179]	(7.3)	-	長石・石英	黄褐色	普通	唇立口縁・下層に横 口縁部外・内面横ナデ 脚部外・内面ナデ・ハケ目	覆土中層	5%
66	土師器	甕	[185]	(6.7)	-	長石・石英・雲母・ 黒色炭化物	にぶい黄褐色	良好	唇立口縁・下層に横い後 口縁部外・内面横ナデ 脚部外・内面ナデ	覆土下層	5%

## 第29号竪穴建物跡（第24～26図）

**調査年度** 平成20年度

**位置** 調査区南部のD3g5区、標高23mほどの台地端部に位置している。

**重複関係** 第94・95号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.11m、短軸3.20mの長方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ5～10cmで、外傾している。

**床** 平坦で、あまり踏み固められてはいない。

**炉** 中央からやや北寄りに付設されている。長径55cm、短径42cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめ、褐色土を埋土して構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

## 炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

3 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量

**ピット** P1は深さ16cmで、床面のほぼ中央に位置している。性格は不明である。

## P1土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子中量

**貯蔵穴** 3か所。貯蔵穴1は、東コーナー部に位置しており、貯蔵穴3を掘り込んでいる。径68cmのはほぼ円形で、深さは44cmである。底面は楕円形で、わずかにくぼんでいる。覆土下層は、ロームブロック・ローム粒子を含む明褐色土と78・81の高坏片や84の甕片などと一緒、北側から投げ込まれた状況を示している。貯蔵穴2は、北コーナー部に位置している。長径60cm、短径44cmの楕円形で、深さ8cmである。底面は浅くくぼん

ている。覆土は、ローム粒子や土器片を含む褐色土で埋め戻されている。貯蔵穴3は東コーナー部に位置しており、貯蔵穴1に掘り込まれている。確認できたのは長径64cm、短径42cm、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

**貯蔵穴1・3土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

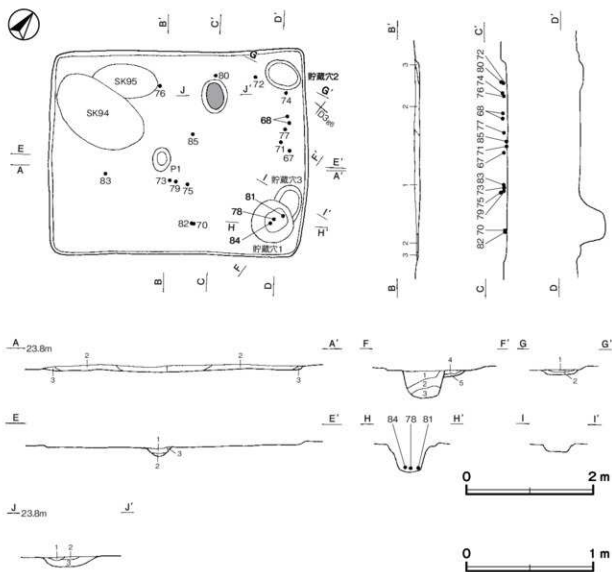
**貯蔵穴2土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**覆土** 3層に分層できる。ローム粒子・焼土粒子などが含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

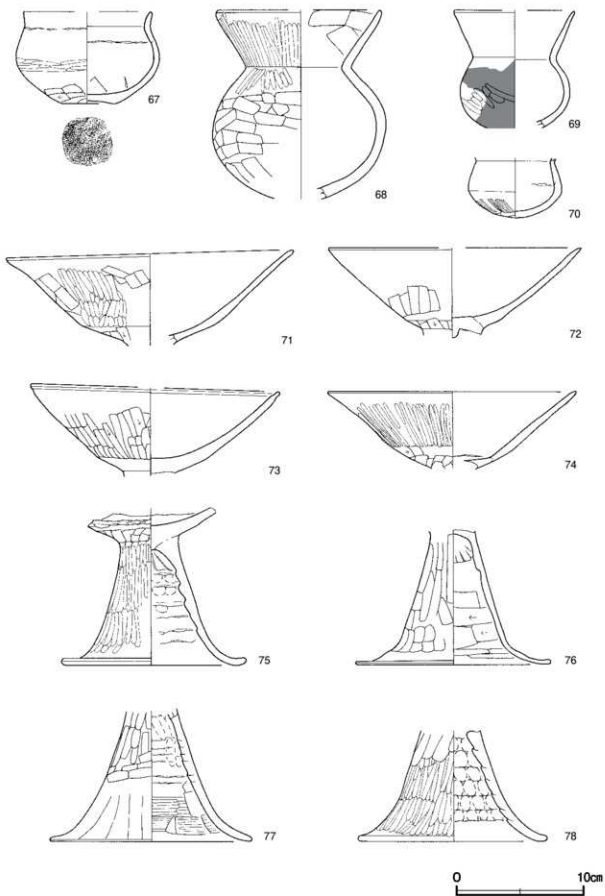
**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量



第24図 第29号堅穴建物跡実測図

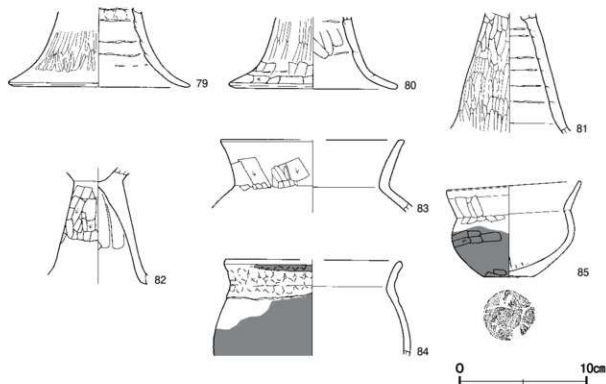




第 25 图 第 29 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)

遺物出土状況 土師器片 115 点(碗類 2, 埴 15, 高坏 70, 甕類 28) が、覆土中層から床面にかけて広範囲に散乱した状態で出土している。すべて破片で、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。



第 26 図 第 29 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 29 号竪穴建物跡出土遺物観察表(第 25・26 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
67	土師器	碗	[100]	7.3	4.2	長石・石英・緑輝・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部中位ヘラ磨き 体部下位ヘラ磨き 輪極み痕 土流	東壁寄り 覆土下層	70% PL. S
68	土師器	埴	[130]	(15.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 体部ヘラナデ	東壁寄り 覆土下層	70% PL. 9
69	土師器	埴	[96]	(9.3)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下位ヘラ磨き 外面磨き	東壁寄り 覆土下層	40%
70	土師器	埴	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナデ 外面下位ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪極み痕	南壁寄り 床面	40%
71	土師器	高坏	22.8	(7.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外面ヘラ磨き 内面横ナデ 接合部ヘラ磨き	東壁寄り 床面	50%
72	土師器	高坏	[200]	(5.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・赤色斑点	橙	普通	坏部外・内面横ナデ 下位ヘラナデ 接合部ヘラ磨き	覆土中層	40%
73	土師器	高坏	[19.7]	(6.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外面横ナデ・ヘラ磨き 内面横ナデ	覆土下層	30%
74	土師器	高坏	19.9	(6.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ磨き 内面横ナデ 接合部ヘラ磨き	覆土下層	30%
75	土師器	高坏	-	12.5	[14.6]	長石・石英・雲母	橙	良好	指口磨り調整 脚部外面ヘラ磨き 脚部内面指押圧・輪極み痕	中央部 覆土中層	50% 起白に転用
76	土師器	高坏	-	(10.7)	[15.6]	長石・石英・小礫	橙	普通	脚部外面ヘラナデ 内面指押圧・ヘラ磨き	覆土下層	50%
77	土師器	高坏	-	(10.4)	16.0	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	脚部外面上位ヘラ磨き 下位ヘラナデ 内面指押圧・ハケ目 輪極み痕	覆土中層	40%
78	土師器	高坏	-	(8.8)	14.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指押圧 輪極み痕	貯蔵穴 覆土下層	30%
79	土師器	高坏	-	(6.3)	14.5	長石・石英	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指押圧 輪極み痕	覆土中層	40%
80	土師器	高坏	-	(5.7)	13.5	長石・石英・雲母・赤色粒子・赤色斑点	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 脚部ヘラナデ 輪極み痕	覆土上層	25%
81	土師器	高坏	-	(9.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指押圧 輪極み痕	貯蔵穴 覆土下層	30%
82	土師器	高坏	-	(9.2)	-	長石・石英	にぶい赤黄	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指押圧・ヘラナデ	南壁寄り 床面	20%
83	土師器	甕	[14.6]	(5.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 頸部ヘラ磨き	覆土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
84	土師器	小形甕 [140]	(7.6)	-	-	長石・石英・雲母	にお燈	普通	口縁部外・内面横ナデ、頸部外面に段差・拍摺押圧、全体ヘラナデ、外面僅付着	貯蔵穴 腹中・下縁	20%
85	土師器	小形甕	106	7.7	4.0	長石・石英・雲母・黒色砂子	灰黄緑	普通	口縁部外面ヘラナデ、内面横ナデ、体部外面中位ヘラ摺り、外面僅付着	中上部 底面	60%

### 第30号竪穴建物跡 (第27・28図)

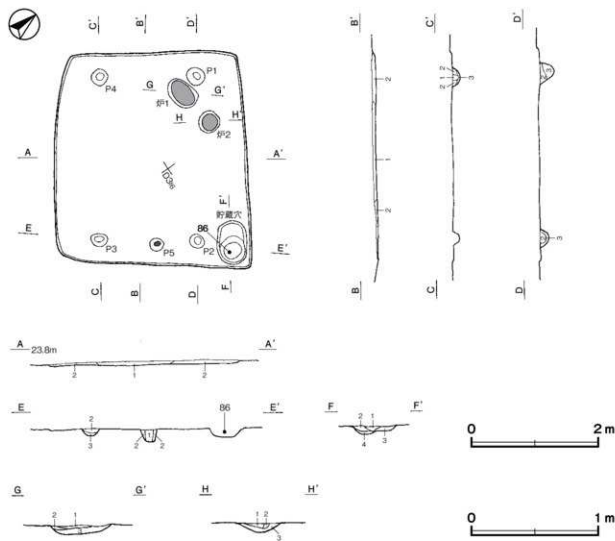
調査年度 平成20年度

位置 調査区南部のD3e5区、標高24mほどの台地端部に位置している。

規模と形状 長軸3.37m、短軸3.05mの長方形で、主軸方向はN-55°-Wである。壁は高さ4~6cmで、外傾している。

床 平坦で、あまり踏み固められてはいない。

炉 2か所。炉1は中央からやや北西寄りに付設されている。長径55cm、短径38cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床を浅く掘りくぼめ、褐色土を埋土して構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉2は中央からやや北寄りに付設されている。径35cmの円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床を



第27図 第30号竪穴建物跡実測図

浅く掘りくはめ、褐色土を埋土して構築されており、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**炉1土層解説**

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**炉2土層解説**

- 1 濃い赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ11～27cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ22cmで、位置から出入口施設に伴うピットである。P5では柱痕跡が確認でき、黒褐色土で埋まっている。P1～P4は柱が抜き取られた後、暗褐色土が流入している。

**P1～5土層解説**

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量   |               |

**貯蔵穴** 東コーナー部に位置している。長径70cm、短径48cmの楕円形で、東部は一段下がり、深さ22cmである。壁は外傾している。覆土上層には、焼土の間に煤が付着していない大形の甕が出土していることから、ある程度埋まってから、火が燃やされ、甕の破片が遺棄されたと思われる。

**貯蔵穴土層解説**

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 濃い赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量  | 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

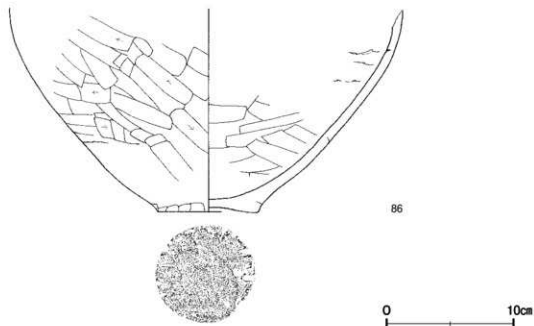
**覆土** 2層に分層できる。ロームブロック・ローム粒子などが含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
|---------------------------|---------------------------|

**遺物出土状況** 土師器片80点(埴4、高坏16、甕類60)が、覆土中層から床面にかけて広範囲に散乱した状態で出土している。すべて破片で、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。86は貯蔵穴覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第28図 第30号堅穴建物跡出土遺物実測図

第30号竪穴建物跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
86	土師器	罍	-	(16.1)	8.0	長石・石英・雲母	にお青	良好	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ・ヘラ磨り・輪磨り	竪穴 覆土下層	25%

表2 古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	継溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								柱穴	竪穴口	ド	伊					
21	D 2b7	N-35°-W	[方形]	[7.40]×[7.20]	10-16	平坦	[全周]	1	-	1	-	人為	土師器、鉄製品	5世紀 前期	本跡→SK60・65-67 焼失建物	
23A	A 21b	N-24°-W	[方形]	[6.90]×[6.45]	-	平坦	-	4	1	3	-	人為 自然	土師器	5世紀 中期	本跡→SI 23 B	
23B	A 21b	N-26°-W	方形	8.54×8.46	44-50	平坦	全周	4	1	1	2	2	土師器、石製品、鉄製品	5世紀 中期	SI 23 A→本跡 焼失建物	
24	A 217	N-34°-W	[長方形]	7.14×(5.90)	30-35	凹凸	[全周]	3	1	-	1	1	人為	土師器、石器、石製品	5世紀 中期	焼失建物
25	D 314	N-35°-W	[方形]	4.35×(4.09)	23-35	ほぼ 平坦	-	-	-	1	3	-	人為	土師器	5世紀 中期	焼失建物
26	D 2e4	N-28°-W	-	(4.26)×(2.54)	16-20	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	5世紀 前期	本跡→SK78
27	D 312	N-8°-W	[方形]	7.52×[7.42]	24-34	平坦 溝 コーナー	-	2	1	1	4	-	人為 自然	土師器、土製品、石製品、鉄製品	5世紀 中期	焼失建物
28	D 315	N-18°-E	方形	3.98×3.77	0-5	平坦	-	2	1	-	1	2	人為	土師器	5世紀 前期	本跡→SY 1、 SK98
29	D 3c5	N-40°-W	長方形	4.11×3.29	5-10	平坦	-	-	-	1	1	3	人為	土師器	5世紀 中期	本跡→SK91・95
30	D 3e5	N-55°-W	長方形	3.37×3.05	4-6	平坦	-	4	1	-	2	1	人為	土師器	5世紀 中期	

## 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない遺構として、炭焼窯跡1基、土坑42基が存在する。以下、これらの遺構のうち炭焼窯跡については文章で記述し、それ以外の遺構と遺物については、一覧表等を掲載する。

## (1) 炭焼窯跡

## 第1号炭焼窯跡 (SK88) (第29図)

調査年度 平成20年度

位置 調査区南部のD3j5区、標高23mほどの台地端部に位置している。

重複関係 第28号竪穴建物跡を掘り込み、第85号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区外域へ延びているため、現存しているのは、長軸3.26m、短軸1.66mで、長軸方向はN-28°-Eである。

炭化室 現存しているのは、長さ2.34m、幅1.66mである。平面形は長方形で、天井部は遺存していない。壁は高さ28-32cmで、外傾している。底面は地山を利用し、ほぼ平坦で、火熱を受け、赤変硬化している。

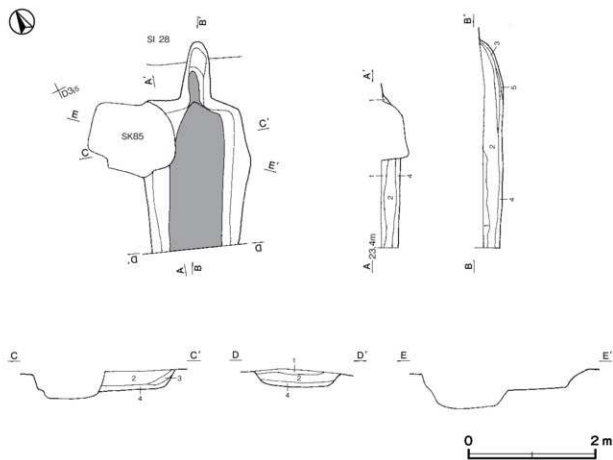
煙道部 奥壁の中央部に位置している。長さ0.94m、幅0.35mで、緩やかに立ち上がっている。炭化室底面から煙道部の中位まで、火熱を受け、赤変硬化している。

覆土 5層に分層できる。すべての層に炭化物やロームブロックが含まれており、埋め戻されている。

## 土層解説

- |   |     |                        |   |     |                        |
|---|-----|------------------------|---|-----|------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 | 黒色  | 炭化物多量、ロームブロック、焼土ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 5 | 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量   |
| 3 | 暗褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |   |     |                        |

所見 遺構の形態から、炭焼窯跡と考えられる。時期は出土遺物がなく不明である。



第29図 第1号炭焼窯跡実測図

(2) 土坑

今回の調査で、時期・性格ともに不明の土坑42基を確認した。以下、これらの土坑について一覧表を掲載する。

表3 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
55	A 2 g7	-	円形	0.70 × 0.65	65	平坦	外堀	自然		
56	A 2 g8	N - 30° - E	楕円形	1.60 × 1.15	28	皿状	外堀	自然	土師器	
57	A 2 h8	-	円形	1.14 × 1.09	70	有段	外堀	自然	土師器、不明鉄片、骨片	
58	A 2 h7	N - 70° - E	楕円形	0.62 × 0.55	27	皿状	外堀	自然		
59	A 2 h8	-	円形	0.64 × 0.60	33	平坦	外堀	自然		
60	D 2 c6	N - 70° - E	楕円形	0.45 × 0.40	12	皿状	縦斜	自然		SI 21 → 本跡
61	D 3 c2	N - 88° - W	不整楕円形	2.18 × 0.79	27 - 61	凹凸	外堀	自然		
62	D 2 c7	N - 87° - W	楕円形	1.09 × 0.85	19	平坦	外堀	自然	土師器	
63	D 2 f7	N - 46° - W	楕円形	0.53 × 0.48	28	平坦	外堀	自然		
64	D 2 c6	N - 7° - E	楕円形	1.23 × 0.87	23 - 66	凹凸	直立	自然	土師器	

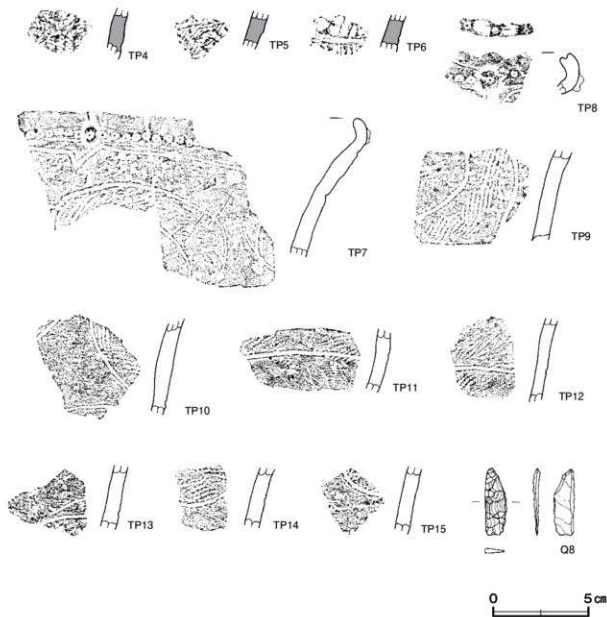
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
65	D 2c6	N-69°-W	楕円形	1.40 × 0.65	58	有段	直立	人為	土師器	SI 21 → 本跡
66	D 2c7	N-54°-W	楕円形	0.98 × 0.58	49	有段	外傾	人為		SI 21 → 本跡
67	D 2b6	N-39°-W	楕円形	1.25 × 0.75	60	皿状	外傾	人為	土師器	SI 21 → 本跡
68	D 2f7	N-67°-E	楕円形	0.80 × 0.52	30	皿状	外傾	自然		
69	D 2f8	-	円形	1.06 × 1.00	40	皿状	外傾	自然	土師器	
70	D 2g8	-	円形	0.68 × 0.65	7-35	凹凸	直立 外傾	人為		
71	D 2f7	N-78°-E	楕円形	1.03 × 0.79	15	平皿	外傾	自然		
72	D 2f9	-	円形	0.60 × 0.56	37	皿状	外傾	自然		
73	D 2f9	-	[円形]	0.87 × 0.86	55	皿状	外傾	自然		
74	D 2c6	N-89°-W	楕円形	1.25 × 0.84	41	皿状	外傾	自然		
75	D 2f8	-	[円形]	0.88 × (0.79)	48	平皿	外傾	自然		本跡 → SK76
76	D 2f8	N-52°-W	楕円形	1.10 × 1.05	21-42	凹凸	外傾	自然	土師器	SK75 → 本跡
77	D 2g5	-	円形	0.71 × 0.65	30	平皿	外傾	自然		
78	D 2c1	N-47°-W	楕円形	0.62 × 0.54	32	皿状	外傾	自然	土師器	SI 26 → 本跡
79	D 2g9	N-81°-W	楕円形	0.42 × 0.36	28	皿状	外傾	自然		
80	D 2c8	N-76°-W	不整楕円形	1.34 × 0.84	31	平皿	外傾	自然	土師器	
81	D 2e9	N-81°-E	不整楕円形	1.31 × 0.98	57	平皿	外傾	自然	土師器	
82	D 2e9	N-67°-W	不整楕円形	1.15 × 0.93	47	平皿	外傾	自然		
83	D 2f6	N-11°-E	楕円形	1.02 × 0.68	82	有段	外傾	自然	土師器	
84	D 2f5	N-1°-W	楕円形	1.10 × 0.80	48	有段	直立	人為	土師器	
85	D 3f5	N-65°-W	不整長方形	1.16 × 0.98	55	平皿	直立 外傾	自然		SY 1 → 本跡
86	D 3f5	N-34°-W	楕円形	1.16 × 1.04	66	皿状	外傾	自然	土師器	
87	D 3f6	N-87°-W	楕円形	1.64 × 1.00	14	平皿	外傾	自然	土師器	
89	D 3f5	-	円形	0.86 × 0.80	6	平皿	外傾	人為	土師器	
90	D 3g5	N-90°-E	楕円形	1.28 × 0.92	70	有段	外傾	自然	土師器、鏡片	
91	D 3f6	-	円形	0.63 × 0.58	20-63	凹凸	直立 外傾	自然		
92	D 3e6	N-30°-W	長方形	1.00 × 0.82	51	皿状	外傾	人為		
94	D 3g5	N-83°-E	楕円形	1.56 × 0.90	75	皿状	外傾	自然	土師器	SI 29 → SK96 → 本跡
95	D 3g5	N-49°-E	[楕円形]	0.98 × 0.54	14	皿状	外傾	自然		SI 29 → 本跡 → SK94
96	D 3c5	-	[円形]	0.80 × 0.80	62	凹凸	外傾	人為		
97	D 3c6	N-81°-E	楕円形	1.60 × 0.98	36-50	凹凸	外傾	自然		
98	D 3f5	N-73°-E	楕丸長方形	1.02 × 0.90	72	平皿	外傾	人為	土師器	SI 28 → 本跡

### (3) 遺構外出土遺物 (第30・31図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図(1)



第31図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第30・31図)

番号	種別	部種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	L Rの単筋縄文を施文	A 27区	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	暗褐	L Rの単筋縄文とループ文を施文	D 32区	
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	暗褐	R LとL Rの羽状縄文を施文	D 32区	
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	黒褐	R LとL Rの羽状縄文を施文	D 32区	
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	R LとL Rの羽状縄文を施文	D 32区	
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	暗褐	磁胎付 隆起線上に割目	D 32区	
TP 7	弥生土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	口縁部内溝 口縁に沿って円形胎付文を伴う円形刺突文施文 体部底縁状の沈滞区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 260区	TP7-15は同一個体
TP 8	弥生土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	口縁部と口縁に沿って円形胎付文を伴う円形刺突文施文	A 260区	
TP 9	弥生土器	深鉢	長石・石英	橙	曲線状の沈滞区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 260区	
TP10	弥生土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	曲線状の沈滞区画内をL Rの単筋縄文で充填 下段に横位の沈滞文	A 260区	



番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	弥生土器	深鉢	長石・石英・赤色砂子	にぶい褐色	横位の沈線区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 2b区	
TP12	弥生土器	深鉢	長石・石英	橙	横位の沈線区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 2b区	
TP13	弥生土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	曲線状の沈線区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 2b区	
TP14	弥生土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐色	曲線状の沈線区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 2b区	
TP15	弥生土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	曲線状の沈線区画内をL Rの単筋縄文で充填	A 2b区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	銅片	3.6	L1	0.3	0.93	緑頁岩	縦長銅片 片側刃調整	A 2c区	PL12

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査で、縄文時代の陥し穴1基や古墳時代中期の竪穴建物跡10棟、時期不明の炭焼窯跡1基、土坑42基を確認した。前回の報告でも竪穴建物跡の時期は、古墳時代中期の一時期のものであり、合わせると31棟が確認できた。遺物は各遺構に関わる土器類とともに、石製模造品（管玉・白玉・有孔円板・剣形品）、鉄製品（小札・鏃・鏃）等が出土している。ここでは、当遺跡の土器群の編年の位置付けから、集落の構成を明らかにするとともに、竪穴建物跡31棟のうち14棟が焼失建物であることについて若干の考察を加え、まとめたい。

### 2 当遺跡の土器群の編年の位置付けと集落構成

#### (1) 当遺跡の土器群の編年の位置付け

当遺跡が所在するつくば市を中心に、古墳時代中期の土器編年について、器種構成を中心に概略を述べる。前半の1・2期は、古墳時代前期の器種構成の中で重要な位置を占めていた器台と台付窯が消え、高坏と埴に代表される中期型器種構成が成立し、展開する時期である。器種を問わず、赤彩される土器が少ないことも特徴である。1期は器形や調整手法などに前期の特徴を残しているものである。2期は中期型器種構成の盛期で、高坏や埴は日常生活のなかでも盛んに使用されていたと思われる。後半の3・4期は、これまで器種構成のなかで中核を占めていた埴と高坏が激減し、多くの割合を占めるようになるのが、丸底または小さな平底を呈する坏と埴との区別がつきにくい土器（埴類とする）である。集落内に須恵器が入ってくるのもこの時期である。3期は高坏・埴・折返し口縁の壺などが少し残り、再び、赤彩される割合が高くなる時期である。4期には甕や置甕の導入に伴い、無底式の甕が出現する。埴類は口径や器高が均一化する傾向にあり、形状は後期の坏に近いものが多くなる時期である。

本遺跡の土器をみると、器種構成では、埴と高坏の占める割合が高く、赤彩されている土器が極めて少ないことを特徴としてあげることができる。前述の中期の土器変遷の1・2期にあたる。

つくば市内の1期の遺跡として、六十日遺跡<sup>1)</sup>、谷田部漆遺跡<sup>2)</sup>、上野古屋敷遺跡<sup>3)</sup>などが挙げられる。1期の高坏の形状は、坏部は浅く、接合部からはほぼ水平に開いてから外傾し、脚部は中実柱状のものから変遷するエンタシス状で裾部が「ハ」の字状に開くもの、坏部の広がりや傾斜が少なく外傾するもの、坏部が深

く内反し立ち上がっているもの、坏部下端が張り出し稜をもつものなど多様である。埴は口縁部が幅広く、内反するものや直立ぎみのものが多い。埴に据え置く甕などを支える土製支脚が伴出することもあり、甕や高坏にはハケ目調整されるものも残っている。

つくば市の2期の遺跡としては、谷田部漆遺跡、上野古屋敷遺跡が挙げられ、集落が継続して営まれている。また、当遺跡から南へ1kmほどに位置する下河原崎谷中台遺跡<sup>41</sup>では集落が営まれ始めている。2期の土器群は、高坏では坏部が内反ぎみのものと外傾して立ち上がるものがある。脚部は1期に比べて太目で、裾部は「ラッパ」状に広がるものが多い。埴は頭部から「く」の字状に外傾して立ち上がるものがほとんどで、直立ぎみのものや内反するものは少なくなっている。折返し口縁の蓋は存在するが、長胴化する。土製支脚はほとんど伴わなくなり、甕などに施されたハケ目調整も少なくなってくる時期である。

このような観点で、本遺跡の堅穴建物跡出土土器群の編年の位置付けをすると、

1期（5世紀前葉） …… SI 1, 2, 9, 11, 13, 20～22, 26, 28

2期（5世紀中葉） …… SI 3～8, 10, 12, 15～19, 23A・B～25, 27, 29, 30

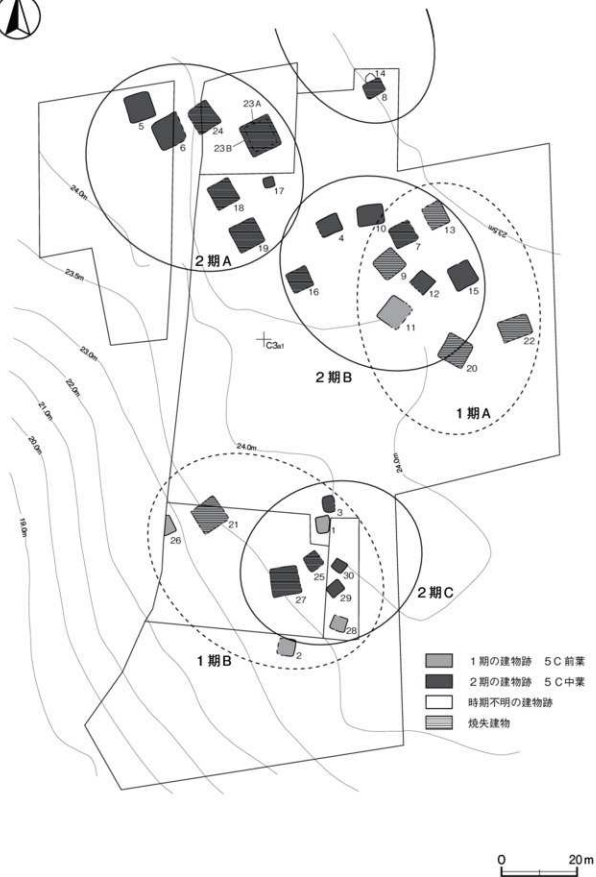
不明 …… SI 14となる。

## (2) 当遺跡の集落構成について

当遺跡は、西谷田川とその支流に挟まれた幅1.1kmほどの台地端部に位置している。この台地では、古墳時代前期の遺跡は知られておらず、中期になると、突如として当遺跡に集落が営まれる。本遺跡に近い前期の遺跡としては、西へ2kmほどの小貝川を望む台地端部に上郷神谷森遺跡<sup>51</sup>、高須賀中台東遺跡<sup>61</sup>、高須賀中台遺跡<sup>71</sup>が隣接して存在している。当財団が発掘調査を行っており、前期の堅穴建物跡は神谷森遺跡では28棟、高須賀中台東遺跡では24棟、高須賀中台遺跡では2棟、確認されている。しかし、中期の建物跡は確認されていない。前期の終末に当地域も再編成された可能性があり、小貝川流域に勢力をもつ支配者が内陸の西谷田川流域への進出拠点として、当遺跡に集落を形成させたと思われる。

当遺跡1期（5世紀前葉）の集落は、2グループで成り立っている。Aグループは調査区中央部から北東寄りの台地平坦部に位置している。一辺が7mを超す大型のSI 11・20の2棟を中心に、中型でやや大きいSI 9・13・22の3棟との5棟で構成されている。1期中核的グループと考えられる。Bグループは調査区南部の台地端部に位置し、大型のSI 21を中心として、小型のSI 1・2・26・28の4棟との5棟で構成されている。

当遺跡2期（5世紀中葉）の集落は、3ないし4グループで成り立っている。Aグループは調査区北西部の台地端部に位置し、大型のSI 5・6・19・23 Bの4棟、中型でやや大きいSI 18・24の2棟、小型のSI 17の1棟との7棟で構成されている。本グループは、大型のものが4棟存在すること、SI 6が石製模造品製作工房と考えられていることなどから、2期の集落のなかで、中核的役割を担っていたと考える。Bグループは調査区中央部からやや北寄りの台地平坦部に位置し、中型でやや大きめのSI 10・15の2棟を中心に、中型のSI 4・7・12・16の4棟との6棟で構成されている。Cグループは調査区南部の台地端部に位置している。大型のSI 27を中心に小型のSI 3・25・29・30の4棟との5棟で構成されている。SI 8は調査区の最北部に位置し、A・Bグループとは少し離れた位置にある。台地端部に沿った北部にもう1つのグループの存在が考えられる。



第32図 古墳時代中期壱穴建物跡全体図

### 3 当遺跡の焼失建物と出土土器について

当遺跡で確認された堅穴建物跡 31 棟のうち 14 棟が焼失建物で、すべて埋め戻されていた。そこで、堅穴建物跡や主柱穴（貯蔵穴）の覆土の状況と土器の出土状況に注目し、建物や主柱穴（貯蔵穴）がどのような状態の時に建物が焼失したのかを検討する。主柱がどのようなものであるか、土器が残されているかで、6種のパターンが想定される。

I類 主柱が立ったまま建物が焼失しているもの（柱穴に柱材あるいは、炭化材が残っている場合もあるが、柱穴の覆土中・下層に焼土ブロックなどは混入していない。貯蔵穴の覆土には、炭化材などが混入している。）

本類はさらに、A種：床面や貯蔵穴の底面に完形に近い土器が残っているもの、B種：床面や貯蔵穴の底面に完形に近い土器が残っていないもの

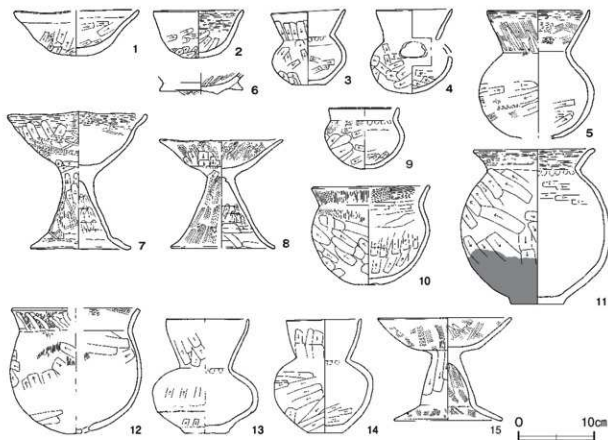
の2種に分類する。

以下、II・III類もA・B種に分けられる。

II類 主柱が抜かれ、主柱穴や貯蔵穴が開口している時に上屋などが焼失しているもの（主柱穴や貯蔵穴の覆土に焼土ブロックや炭化材などが混入している。）

III類 主柱が抜かれ、主柱穴や貯蔵穴が埋め戻されてから上屋などが焼失しているもの（主柱穴や貯蔵穴の覆土に焼土ブロックや炭化材などが混入しておらず、覆土下層から床面にかけて焼土ブロックや炭化材などが出土する。）

当遺跡の焼失建物跡を6種のパターンに当てはめてみると、



第33図 1期の土器群（1～12 S120, 13～15 S122）

I-A……該当なし  
 II-A……SI 16・18・22・24・27  
 III-A……SI 8・19・20・23 B

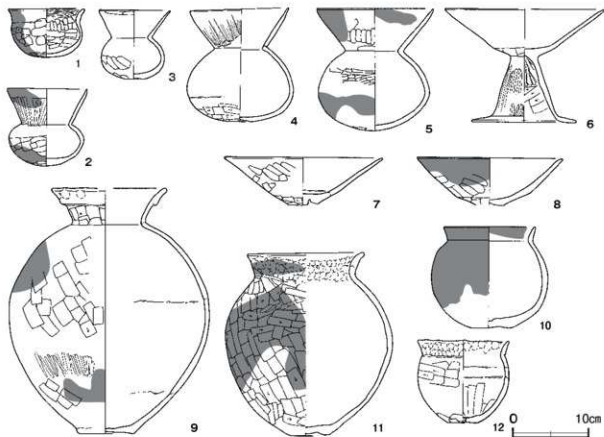
I-B……該当なし  
 II-B……SI 21・25  
 III-B……SI 7・9・13

となる。

当遺跡の焼失建物跡 14 棟のなかで I 類のものが確認されなかったことから、次のことを指摘できる。1 点目は主柱はすべて抜かれているということである。主柱焼失後、地中の柱がそのまま放置され、朽ち果てるような場合も想定されるが、本遺跡の焼失建物跡で柱穴の覆土に焼土ブロックなどを含まず、貯蔵穴に炭化材などが混入した事例は確認されなかったのである。2 点目は主柱が抜かれてから焼失しているということから、焼失は失火や放火ではなく故意のものとするのが妥当と思われる。主柱を抜き、上屋や腐材などを燃やすのが、当遺跡の焼失建物跡の実態であったと推測される。

主柱を抜いた後、柱穴を開口したまま上屋や腐材などを燃やすか、柱穴を埋め戻してから上屋や腐材などを燃やすのかについては、主柱を抜いた後、竪穴建物内で作業などを予定している場合は、柱穴や貯蔵穴を埋め戻すと思われる。本遺跡の場合、14 棟のうち 7 棟は焼失前に柱穴や貯蔵穴を埋め戻している。

まず、III-A に分類される SI 20 について考えてみたい。SI 20 では、貯蔵穴側の床面から、第 33 図 10 の「貝殻を砕いた破片がまとまって」<sup>8)</sup> 入っていた底部をくぼませた甕と、12 の底部を穿孔した甕が重なって出土している。10・12 は、ともに外面に煤が付着している。また、貯蔵穴の覆土中層からは 8 の高坏と 11 の甕が横位の状態でそれぞれ出土している。さらに、南西コーナー部の壁溝から 4 の体部上半部に 3cm ほどの穿孔をもつ小形甕が正位の状態で出土し、周辺の床面から 7 の高坏や 3 の小形甕、5 の底部を欠いている大



第 34 図 2 期の土器群 (1～12 SI24)

形埜も出土している。これらの土器には煤が付着しておらず、火災後に供えられたものと思われる。その後、堅穴そのものも埋め戻されている。SI 20のあり方は、穿孔されている土器の出土状況などから、埋葬と関わる可能性が考えられ、柱穴・貯蔵穴の埋め戻し→土器供献→廃屋焼却→土器供献→堅穴の埋め戻しという過程が想定される。

次に、Ⅱ-Aに分類されるSI 24・27について触れておきたい。Ⅱ類は柱穴などが開口している時点で建物が焼失しているものであるが、SI 24・27では、その後、堅穴建物内に埜などの土器を供えた行為が確認されている。この事例は建物の焼失前に残された土器には煤が付着し、焼失後に供えられた土器には煤が付着していないことから判断できる。SI 24・27も土器を供えた行為の後、堅穴は埋め戻されている。

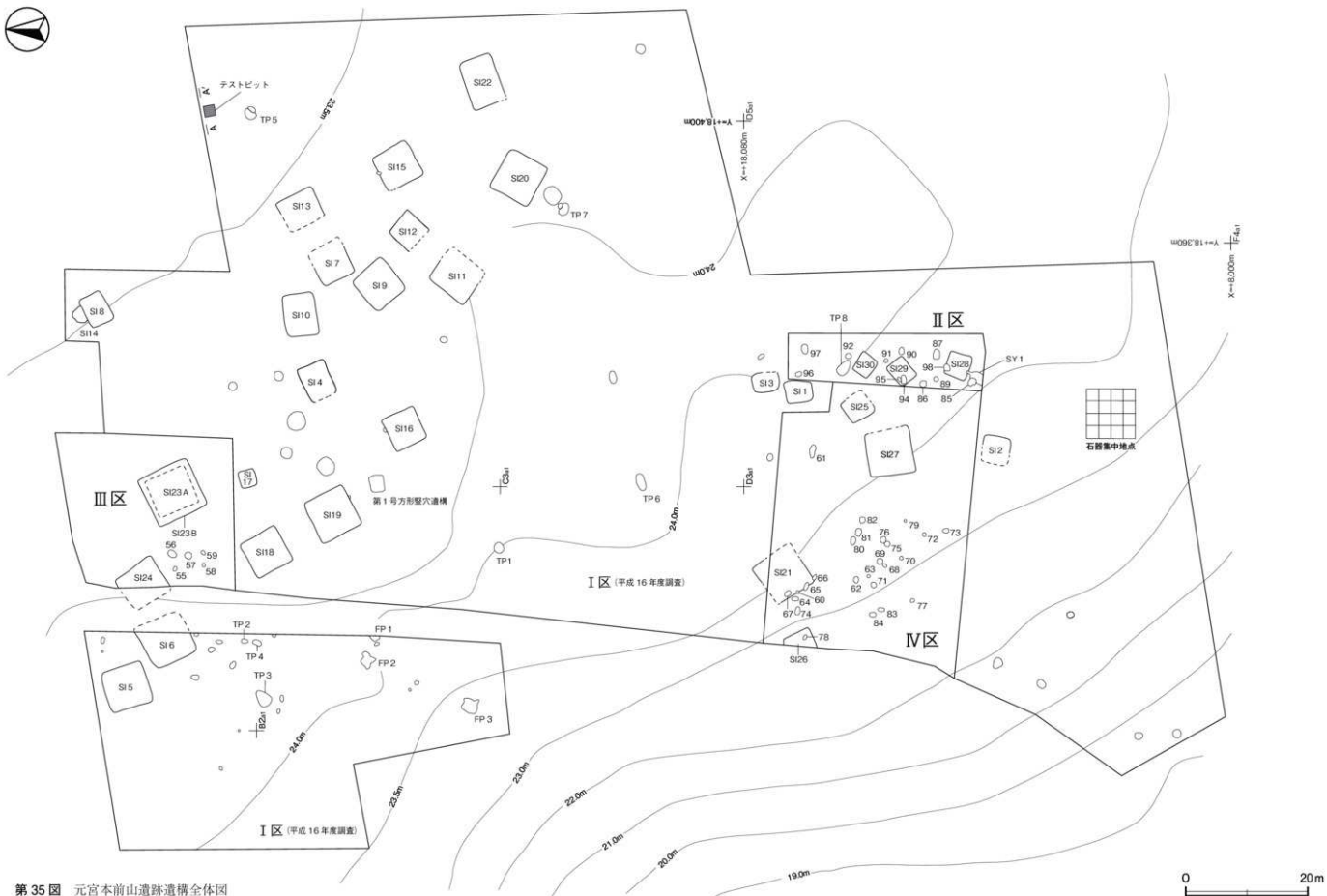
このような状況は、堅穴内で上屋や廃材などを燃やすことと堅穴を埋め戻すことが、祭祀的行為と深く関連している事例と考える。

#### 4 おわりに

以上、元宮本前山遺跡の集落の構成や焼失建物の実態について若干の考察を試みた。成果の一つは、焼失建物跡の14棟のすべてが、主柱を抜いた後、上屋などを燃やしてから、堅穴を埋め戻していることを確かめられたことである。その中には、上屋などの焼失後に土器を供える行為や埋葬と関わる可能性が考えられる行為がなされていたと想定されるものがあった。建物の上屋や廃材を燃やすことや堅穴を埋め戻す行為は、前述の祭祀的行為と深く関連するものと思われる。資料の増加をまって、今後も焼失建物や祭祀的行為の実態に迫っていききたい。

#### 註

- 1) 小澤重雄「葛城一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 六十日遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集 2000年3月
- 2) 寺門子勝・田原康司・梅澤貴司「鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 3) a 大塚雅昭・三谷正・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月  
b 川井正一「上野古屋敷遺跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集 2008年3月
- 4) 高野裕隆「下河原崎谷中台遺跡 鳥名ワタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第282集 2007年3月
- 5) 小泉光正「一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第66集 1991年3月
- 6) 坂本勝彦「高須質中台東遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第382集 2014年3月
- 7) 茂木祝男「一般県道赤浜谷田部線県道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 高須質中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第142集 1998年3月
- 8) 高野裕隆「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第265集 2006年3月



第35図 元宮本前山遺跡遺構全体図



写 真 图 版



第24号竖穴建物跡遺物出土状況







平成 20 年 度  
調 査 区 全 景



平成 24 年 度  
調 査 区 全 景



平成 25 年 度  
調 査 区 全 景



第21号竖穴建物跡  
完掘状況



第23B号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第23B号竖穴建物跡  
貯藏穴  
遺物出土状況



第23A・B号  
竖穴建物跡  
完掘状況



第24号竖穴建物跡  
遺物出土状況①



第24号竖穴建物跡  
遺物出土状況②

PL4



第24号竖穴建物跡  
完掘状況



第25号竖穴建物跡  
完掘状況



第26号竖穴建物跡  
完掘状況



第27号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第27号竖穴建物跡  
完掘状況



第28号竖穴建物跡  
完掘状況

PL6



第29号竖穴建物跡  
遺物出土状況①



第29号竖穴建物跡  
遺物出土状況②



第29号竖穴建物跡  
貯藏穴  
遺物出土状況

第29号竖穴建物跡  
完掘状況



第30号竖穴建物跡  
完掘状況



第1号炭焼窯跡  
完掘状況  
(煙道側から)

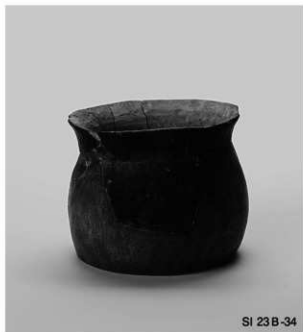








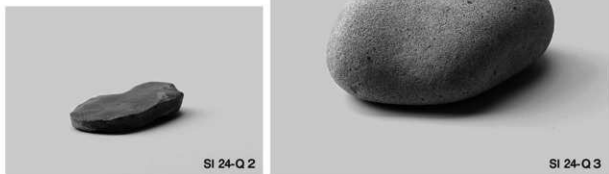
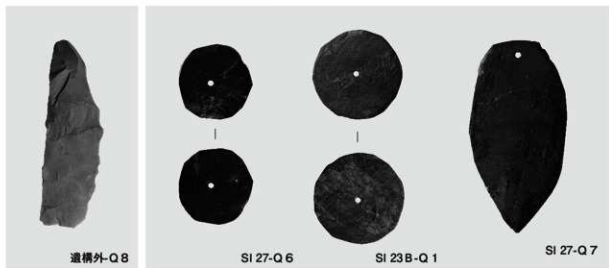
第23B・24・27・29号竖穴建物跡出土土器



第23B・24・27号竪穴建物跡出土土器



第23 B · 24 · 28号竖穴建物跡出土土器



第21・23B・24・27号竪穴建物跡、遺構外出土遺物

## 抄 録

ふりがな	もとみやもとまやまいせきに								
書名	元宮本前山遺跡2								
副書名	上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第404集								
著者名	海老澤稔								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587								
発行日	2015(平成27)年3月16日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
元宮本前山 遺跡	茨城県つくば市大字上河原崎元宮本 字前山49番地の4 ほか	08220 1 559	36度 04分 25秒	140度 02分 09秒	20 ~ 24 m	20080401 ~ 20080430 20120801 ~ 20120831 20131101 ~ 20131130	152 m <sup>2</sup>  460 m <sup>2</sup>  848 m <sup>2</sup>	上河原崎・中西特定土地地区画整理事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元宮本前山 遺跡	集落跡	古墳	竪穴建物跡	10棟	土師器(碗・埴・高坏・壺・甕・小形甕)、土製品(土玉)、石器(砥石・台石)、石製品(管玉・白玉・有孔円板・剣形品)、鉄製品(小札)・鐵・鎌)		焼失建物跡5棟のうち2棟で、上屋などの焼失後、高坏や土器片の上に埴を供える祭祀的行為がなされていた。		
	狩猟場	縄文	陥し穴	1基					
	その他	時期不明	炭焼窯跡 土坑	1基 42基	縄文土器(深鉢)、弥生土器(深鉢)、石器(剥片)				
要約	旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。縄文時代では、台地端部において、陥し穴が確認された。竪穴建物跡はいずれも古墳時代中期のもので、2時期に分けられる。集落は7mを越す大型の建物を中心として、5棟~7棟で成り立っている3グループで構成されていた。また、10棟のうち5棟が焼失建物跡で、それらは、埋め戻されていた。								

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Professional ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON ES-G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷	印刷所へは、	Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第404集

## 元宮本前山遺跡 2

上河原崎・中西特定土地地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書 5

平成27 (2015) 年 3月13日 印刷

平成27 (2015) 年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒310-0911 水戸市見和3丁目1528-38

TEL 0120-23-1473